
アマテラス

織部鶉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アマテラス

【Nコード】

N5895Y

【作者名】

織部鶉

【あらすじ】

謎の侵略生命体、タタリ——地球を覆わんとするタタリの侵攻に対し、地球の軍隊は対抗、全面戦争へと発展してから15年以上……戦況は悪化するばかりであった。

日本も北海道と東北地方を占領されて以来、じわじわとタタリの侵攻を許していた。そんな中、最前線の空軍力とされる航空自衛隊特別第一防空隊、通称《SDC1》のパイロット《須佐美 醇一》と《櫛名田 祕》は、ある日の要撃任務で”今までとは異なる性質を持つタタリ”に遭遇する。カテゴリーエラーと称された強力な相

手に万事休しかけたその瞬間——未来からやってきたと言う謎の戦闘機が西暦2022年日本の空に舞う。その最強の戦闘機は『F・0天照』と呼ばれた。そして天照らす救いの神の中には、一人の少女が鎮座していた。

序章

序章

昼間、薄雲の掛かった空に十数の黒点が浮いている。

それらは集まったり離れたりを繰り返しながら空を移動し、目的の地上めがけていくつも爆弾を落とす。体長は小さな漁船ほどで、肌は硬質な黒色をしていた。それらは爆発の被害を確かめるように意思を持って滞空した後、南に向かって悠々と空を飛び移動していた。

その対向方面から飛んでくる2つの影。戦闘機だ。

片方の戦闘機はエンジンから青色の火を放ちながら直進して来る。そしてスピードを緩めぬまま真ん中に突っ込み、2門の機関砲を開いて攻撃を加える。あまりの速さに黒い物体達はほとんど反応できなかった。損傷の激しい2、3機はバランスを崩して空中分解し、抱えていた爆弾の発火に巻き込まれて空中に散った。

間髪なく飛んでくる2つ目の戦闘機。機体は1つ目の戦闘機よりも1回り大きく、エンジンからは白色の火を噴いていた。機は最初の戦闘機を凌駕する速さで飛び、2門の機関砲で黒い物体達を撃ち碎く。

それからすぐに機首を起こして90度に上昇した。遥か眼下に黒点が見える位置で機体を反転し、再び機関砲を放ちながら急降下する。それもただ勢いで落ちるだけではない。重なるG（重力加速度）を感じさせない細やかな挙動で、残る敵を確実に撃ち落とす。

急降下する戦闘機が通過した数秒後に、最後の砲火を浴びた黒の物体は残らず爆散した。

仕事を終えた2機の戦闘機は、機体を水平に保って基地へと帰還する。

こんな戦いは今に始まったことではない。音もなく現れた侵略者たちは、15年以上に渡って地球文明を脅かし、占領地拡大を続けている。既に何千万という人が殺され、対抗する国家も窮地に立たされている。

しかし、そんな脅威に正面から立ち向かうのは、空の戦士たち。そう、彼らは――

第1章その1 カテゴリーエラー

「……どっちだ」

「うー……」

ババ抜きでジューズ1本を賭けていた。

《西暦2022年6月2日木曜日 午後2時10分
航空空母《高天原》艦内通路》

「さつさと抜け秘^{ひめる}、俺だつて4連敗は嫌なんだよ」

「っさいな！ ボクだつてお前なんかに奢りたくないんだよ！」

「知るか！ 頼むから早く選んでくれ！」

男、須佐美^{すさみ} 醇一^{じゅんいち}は着なれたフライトスーツ姿で胡坐をかき、通路の真ん中に座り込んでいた。右手にはスペードの2とジョーカーのカード。空いた左手は短い髪をぼりぼりと掻いている。

「醇一のくせに急かすな！ ああ……もうちょつとで見抜けそうだったのに！」

女、櫛名田^{くしなだ} 秘も醇一^{ひめる}と同じくフライトスーツで胡坐という格好で対面に座っていた。145センチの体格は背を曲げて縮こまると更に小さく見える。秘はショートヘアを小さく揺らしながら右手を伸ばし、醇一のトランプを1枚引き抜いた。

「よつしゃあ醇一くたばつた！ 楽勝楽勝っ！」

「な……何で4連敗……」

まんまとスペードの2を抜かれた醇一は両手を床に付けて敗者の声を漏らす。一方秘はぴよこんと立ち上がってから女らしからぬガッツポーズを決めた。

醇一は23歳、秘は20歳。どちらも今月のお小遣い（……で賭け事をしているような年齢ではない。しかしジューズ1本1500円ともなれば話は違ってくる。

「ほら醇一、さつさと自販機まわしなよ。それでボクに冷えたコーラを差し出すんだ」

「うるせえバカ。1口で飲み切るなよ」

長い通路の中に1つだけ置かれた自販機。異様な金額で設定されたこのベンダーを利用する人はほとんど居ない。しかし2人にとって、それを敢えて賭けるのが、地に足が着いていないこの基地での少ない楽しみとなっている。

「ちえっ、これで6千円かよ。ほらさつさと開ける祕」

「わるいね醇一、そんじゃさっそくごくごく……」

祕は開封したコーラの缶を両手に持って傾げる。そしてごくごくと4回喉を鳴らしても止まらない気配を感じた醇一は、祕の腕をとつさに掴んで缶を引き離す。

「おいもう半分しかねーだろ！ 350ミリしか入ってないんだから遠慮しろよ」

「かあーやつぱり勝利の味は何回味わっても飽きないな。ほら、半分飲んじやったからあとは敗者で片付けてよ」

「言われなくてももう渡すかったの」

と文句を垂らしつつ、醇一は奪い取った缶をそのまま飲み干す。

「あー、また人目も気にせずいちやついてるパイロット達がいるよ」

2人の様子を見ていた女性が、右手で指を差ししながら通路を歩いてくる。眼鏡を掛けたポニーテールの彼女は堀越^{ほりこし}夜見^{よみ}。16歳でありながら醇一や祕と同じ職場で働いている。

白衣の彼女は2人の元まで歩いてくると、ポケットに入れていたラスクを齧りながら言った。

「今日はどっちが勝ったの？」

祕は頬に指を当てながら余裕の表情を浮かべていた。

「聞くまでもなくボクでしょ。醇一の情けない顔見てれば判るじゃん」

「相変わらず仲がいいね……でもこれは売れるよ、自販機の前で育まれる友情」

親指を立てて年相応の幼い笑顔を浮かべる夜見。醇一は情けないと言われた表情を改めようと頬を軽くたたいてから言う。

「事あるごとに売れる売れるって言うけど、お前は一体何を売るつもりなんだ夜見。それにこんなところで勝負してるのは、結果が出た直後に清算しないと有耶無耶になるからだよ」

「ふうん。それにしてもすごいよね」

「へ？」

「何が？」

醇一と祕が表情を揃えて夜見に聞き返す。

「だって何の自覚もなしに男女が1つの缶を飲みまわしてるんだよ？」

醇一は当たり前と言わんばかりに

「そうなるだろ……2本も買ってられっか」

祕は不思議そうに

「さすがの醇一でも口に毒がついてる訳じゃないし……何か問題でもあるのか？」

「その理屈なら心配するのは俺の方だろ！ 大体、忘れてるようだけど俺はお前より上、上官なんだぞ」

「上官なら相応な態度と勝負の結果を見せてくれないとねえ」

「口の減らないチビだなこなくそっ！」

「誰がチビだこんにやろ！」

いちいち聞いた自分がバカだった、そう思った夜見は本来先に言うべき用件を伝えた。

「えっと……2人とももうアラート待機の交代時間過ぎてるよ？」

ほんの1秒だけ2人は固まった。しかし、気付いた時には既に手遅れだった。

「きいー……さあー……まあー……らあー……」

背後からぬるりと現れた凹凸の激しいボデイラインの影。そのドスの利いた声は女性ながらも十分な迫力を醸し出していた。

「げっ、豊さん……」

「ささつ三佐がなんでわざわざこんな所に!？」

まず醇一がひきつった笑いを浮かべ、祕は慌て調子に質問をぶつける。

「……もう警戒待機員交代の時間は過ぎてるぞ。今緊急発進命令出されたらどうするつもりなんだ」

醇一たちの上司である女性左官の豊野とよの 萌美めぐみは、肩に掛かる程度に伸びた髪を少し膨らませて沸々とした怒りを露わにしていた。そして顔には醇一とは違う心情の引きつった笑みを浮かべ、眉間をぴくぴくと動かしている。

警戒待機・アラートとは端的に、緊急な事案が発生した際1番に出ていく重要な任務である。その当番をほつ放りだして雑談をしていたのなら、鬼教官と恐れられる豊野でなくとも誰であれ怒るはずだ。

「違うんだ豊さん! 俺たち今から行こうとしたんだけど夜見が臨床データ取りたいって引き止めやがって」

「いきなり私のせい!?! 臨床データは取りたいけどアラートの邪魔まではしないって! それ以前に話ねつ造すんな!」

「こら夜見、余計な事言わなくても解ってる。さてバカ須佐美……ちゃんとした言い訳をするか今すぐアラートルームに行くか選ばせてやるぞ。それとは別に豊さんって呼ぶの止めろ、端折らずちゃんと豊野三佐と言え」

豊野は据わった目つきで醇一を睨む。彼の出まかせ嘘など考えるまでもなく判る、それほど彼女は長い間醇一達の上官としてその職務に就いている。

「で、でもさ豊さん、まだ前シフトの大戸さん達がルームにいるでしょ。俺が後でちゃんと謝るからそこまで急がなくても」

「彼らは昼飯食べてないとかでとつと部屋を空けたぞ。お前と櫛名田がすぐ来るってアテにしていたからな」

「え……?」

「要するに今室内はからっぽだ。あと数分……いや、あと数十秒も

空けていたら国常艦長こくじょうかんちやうからどんな恐ろしい処罰が下りるか解ったもんじゃないぞ。私みたく話すら聞いてくれないだらうからな」

想像を巡らせていては切りがない。2人は冷や汗を流しながらも表情を整え、アラートルームまで走って移動しようと1歩を踏み出した。しかしその時――

『スクランブル、スクランブル』

通路の警報ライトが点灯すると共に男性オペレーターの声が響く。絶妙すぎるタイミングに、豊野はもう1度醇一達のケツを蹴り上げてハンガーに向かわせようとしたが、視線を2人に戻したとき既に彼らは居なかった。

醇一と祕は紛れもないパイロットである。故に体は、言葉による命令を頭より先に体で理解する。状況を説明されるまでもなく、警報のサイレンと“ス”の一言があれば格納施設ハンガーへ急行し、真つ先に現場へ向かつて愛機を飛ばす。

この時も、2人の行動だけはいつも通りだった。

「準備は!？」

通路からハンガーへ繋がる直通のスライダーを抜けた2人は、駆け足で戦闘機に寄りながら整備員に訊ねる。そして男の整備員は、当たり前だと言わんばかりの表情を浮かべながら敬礼をした。

「遅れてすみませんっ、すぐ乗ります!」

醇一の後ろに付いていた祕もタラップを上がってコックピットへと乗り込む。それから10秒もしない内に戦闘機のエンジンをかけて計器の具合を確かめた。

「さーて今日の調子はどうかな心神ちゃん」

あまり広いとは言えないハンガー内に猛烈なエンジン音が響く。

醇一はおおよそ計器が正常に作動していると判断してから通信機器マーションヤラーの回路を開いた。そして彼が準備している間に航空誘導員達はハッチを開き、最後の準備を整えた。

「豊さん準備おっけー」

『だからその豊さんつてのを止めると……まあ今はいい。櫛名田も行けるか』

戦闘指揮官でもある豊野はすぐ指令室に戻っていた。そして数人のオペレーターに対して同時に指示を送りつつ、スピーカーを通して祕にも呼びかける。

『櫛名田も大丈夫か』

『はい、いつでも出れます』

『よし。ハッチ確認、出撃準備良し。ストーム1、ストーム2 離艦』
コールサインで呼ばれた醇一と祕の戦闘機はカタパルトの推力を得てハッチから飛び出し、広大な大空へと滑り出した。

空を飛ぶ巨大空母《高天原》^{たかあまはら}から離艦した2機は指示方向へと全力で進む。離艦の緊張から解放されると、醇一は指令室の豊野に問いかけた。

「で、今日は何のスクランブルなんです？」

『あー……うむ、それなんだが』

いつもなら歯切れよく情報を簡潔に伝えてくれる豊野が、何故か難しい声色で返事をする。祕は追うように問いを重ねた。

「もしかしてレベル2以上のタタリですか？ それとも……タタリじゃないとか」

「ちゃんと答えてくれよ豊さん」

なおも豊野ははつきりと答えない。2人は違和感を通り越して気味の悪さまでも感じ始めていた。

『悪い、ちよつと様子がおかしいんだ』

「タタリじゃない調査なら地上の航空隊に任せればいいのに」

醇一は文句を呟きながらもモニタリングされた目標地点へと機を飛ばす。それから少しの間を空けてようやく豊野が返事した。

『確かにタタリの反応なんだが……その数が1しか確認できない。それも形状が異様に大きいんだ』

「デコイとかステルス分類……？ でもそれなら1機だけレーダーに映るってのもおかしいよね」

秘はもちろん、情報の分析を行っているオペレーター達も見慣れない現象に唸り声を立てていた。

「まあ敵影があるなら確認してみるまでだ。とっとと行くぞ秘」

「お、おいこら醇一！ 1人で突っ込むなよ！」

2機のF-3心神は青色の火をエンジンから吹かしながら、少し曇り掛かった渥美半島沖の空に向かって全速力で向かう。その2機と謎の機影を見つめながら、豊野は奥歯をかみしめていた。

「（一体何だこれは……）」

豊野は戦闘指揮官として、正確な情報と指示を出し続けるプライドがあつた。それは確かな経験と判断力に裏打ちされているが、直面している状況にはどうしても簡単な答えを出せずにいた。

タタリ——それは、この星の人類文明を侵略する謎の存在。

人間とはかけ離れた容姿・形態を持ちながら、人間の軍隊と同じようなまとまりで陸、海、空を攻め、住処はもちろん人命までも奪っていく……それはまさに現代の脅威である。

1度はその脅威に滅ぼされそうになったが、人類はなんとか対抗するまでの軍力を整えた。しかしそれでも、有効な火力・対抗力はまだ得られていない。いずれは破滅するであろう防衛戦を苦心しながら続けているのが現状である。

『須佐美、櫛名田、もうすぐ目標を肉眼で確認できる空域に入るぞ』

誰もが異常事態にある事を理解していた。これまでのタタリ（……）なら相応の防衛手段を立てる余裕はある。しかし今捉えているのは、タタリの中でも特に謎の存在だ。醇一達の肉眼目視が無ければミサイルも機銃も撃ち込むことは出来ない。

「醇一、目標見えてる？」

秘の問いかけがヘッドホンから伝わり、彼は首を伸ばして辺りを見渡す。

「真っ直ぐ来ているはずなんだけど……分析結果は縦直径30メ

「トル、こんなデカブツ見逃さない方が難しいぞ」

肉眼で確認するには難しい距離ではあるが、依然として目標は動かない。少し焦りやら興味やらが湧きだした醇一は、アフターバーナーを吹かして急行すると豊野に伝えようとした、その瞬間――

「うおッ！！？」「うひゃあッ！」

突然猛烈な乱気流が醇一と祕の機体を揺らした。あまりにも予想外かつ強力な風に、戦闘機のシステムがけたたましく警告音を鳴らす。機体の速度は急激に落ち込み、空中で大きくバランスを崩してしまった。

『どうした須佐美！ 櫛名田！！』

2人の耳にはかすかに、騒音に紛れて豊野の声が聞こえた。しかし答える余裕は無かった。原因を見つける以前に、もはや航行するだけでも精いっぱいだったのだ。

「くっ……おお……！」

醇一は下に向いていた機首を何とか起こすと、ようやく安定した向きに飛び始めた。そして祕の様子を窺う。

「大丈夫か祕！？ 返事しろ！」

「何とか……！ 今どこにいるの？」

「大して離れてねえ。お前から見て2時方向の少し下にいる。まったく……こんな突風どこから飛んできて――」

祕の位置を確認すると同時に、モニターで目標を追っていた醇一は息をのんだ。同刻、指令室に居た豊野も目を見開いていた。

「デカブツが一瞬で……こんなに移動するはずが」

何故か追っていたはずの目標が2人の遙か後方に移動していた。それも風にもまれていたほんの数秒の間に。

『須佐美！ 後ろだ！！』

目標は停止状態からまた速度を上げて迫ってくる。今度は醇一の背後に向かって移動し始めていた。後方を取られてしまつてはたとえ人間相手でもタタリ相手でも不利になってしまう。そうはさせまいと彼は無意識のうちに上昇を始め、高高度で旋回しながら目標を

肉眼視しようと試みた。

「三佐、タタリには明確な攻撃意思があります！ 攻撃許可をください！」

祕は醇一の位置を確認しながら目標に向かって旋回していた。そんな彼女の要請に、豊野は仕方なく許可を出そうとヘッドセットに指を添えた。

『ダメだ』

豊野の命令を遮る男の声。年季の入った重く太い声は醇一達のヘッドホンにも届いた。

『こ、国常指令……？』

声の主は国常 英治、航空空母《高天原》の艦長、つまり最高位の指揮者でもある。

『2人とも状況を再度報告しろ。攻撃よりも先にガンカメラで映像を送れ』

「は、はい」

普段の戦闘指揮は全て豊野に任されているはずなのに、何故このタイミングで艦長が出てくるのか。そんな疑問は元より、国常の存在そのものが全隊員を強く緊張させていた。

豊野は国常の命令を正しく伝えるために言い直す。

『良い具合の位置にいるな須佐美。モニターをガンカメラに切り替えてオートズーム撮影を開始。以後は適当な飛行を続けながらこちらの指示を待て』

「了解豊さん。さて……人をおちよくるのもいい加減にしてもらわないとな。祕、余裕あれば俺の援護を頼む」

「了解、後ろに付きながら広域警戒を続けるよ」

醇一はもう1度目標の位置を捉えてからモニターをガンカメラに切り替える。そして機体を安定させてから速度を上げつつ、鮮明に目標の姿を捉えられる距離まで詰め寄った。

「雲に隠れながらゆっくり移動してやがる……でもここから高度を上げれば丸裸なはず。そら、かくれんぼは終わりだっ！」

先ほどの突風が目標によるものである、という証拠はない。しかし直接突風を体験した2人には断定に足る確証があった。間違いない目標によるもの、そしてタタリによる攻撃だと、そう信じて疑わなかった。

「よし、目標を確——」

そこにタタリが居る事は誰もが解っていた。

しかし現われたのは、醇一達が知るものではなかった。

普通のタタリよりもはるかに複雑な体躯構造をしている。模するものは人が機械か、目先に浮かぶそれ（・・・）はどちらともつかぬ造形をしていた。人間のような顔が醇一の方へと向けられると、彼は言葉を失ったまま目標に向かって飛んでいた。

『あれは、一体……』

ガンカメラで確認された映像の静止画が巨大モニターに映し出されると、豊野は無意識に呟いてしまう。他のオペレーターや、準備中の支援航空部隊のパイロット達も、同時にその画像を見て驚きを露わにしていた。

『……豊野』

ざわめく指令室に響く、低くて重い声。国常は今までの調子をまったく変えずに豊野を名指しで呼んだ。

『す、すみません。目標があまりに……しかしタタリという事は確認できました。攻撃許可を出しても構いま——』

『第1特別戦闘配置だ。全隊員を動員し、目標の撃破とデータ収集に全力を尽くせ』

『わ……解りました。それでは——《全艦内員に通達する。艦長より第1特別戦闘配置が発令された。全職員・隊員は配置に付き、非戦闘員は指定の避難所に移動しろ》』

その命令は、想定しうる上で最大級の有事に発せられるものだった。具体的な状況を説明されずとも誰もが血の凍る思いをする、そんな特別な命令だ。

「ちい……厄介な相手がお出でなさる時にアラートとは、面倒な事

この上ないなっ！」

醇一は毒づきながら戦闘機を一気に加速させる。そしてタタリに対し正確なロックを決めてから、すぐにミサイル発射のスイッチを押した。

「醇一が撃つなら、ボクも勝手に撃つたって怒られないよなっ！」

新しい戦闘命令は確かに来ていない。しかし状況を1番早く、1番克明に見ている2人には次にやるべきことが判っていた。今カメラに映っている30メートルの巨大なタタリに、出来るだけ打撃を与えつつ増援部隊を待つ。それが実行可能な最大限の努力だ。

「当たれえッー！」

もはや撃墜する、という意識はない。中型のタタリですら何十発と言つミサイルでようやく動きを封じ込められたのに、こんな巨大な敵をミサイル1発で墜とせる訳がない。そう理解はしているが、前線の2人がすべき事は変わらない。

「あ、当たった！」

祕は噴き上がった爆炎を見て少し声を弾ませた。醇一もとりあえず命中した事に心を落ち着かせたが、すぐ違和感がある事に気付いた。

「違う……当たっていない」

「なっ、どういう事だよ醇一？」

醇一はタタリを肉眼で確認できる距離まで到達した。祕も少し後について飛んでいる。

「俺たちが装備しているのはタタリの装甲を貫徹し、内部で爆発させるものはずだ。それがあんな派手な爆発をすと言つ事は……もし表面で爆発したとしても、あの爆炎の噴き方は明らかにおかしい」

「ああもっ、はっきり言えよ！」

違和感を覚えられない祕はじれったい声を漏らす。一方でその様子をモニターで冷静に見ていた豊野は、醇一と同じく違和感と要因に気付いていた。

『風だ……突風に阻まれている』

「か、かぜえ？」

いまいち納得のいかない祕は、効果を確かめようと旋回しながらタタリと距離を詰める。そんな彼女を落ち着かせるために、醇一は小さく呼吸を整えてから口を開いた。

「さつき食らった突風は、あのタタリが放ったってお前も解るだろ。奴はその突風で、俺たちが撃ったミサイルをバラバラにして迎撃したんだ。……つくづく腹の立つ戦闘力だな」

戦闘機の兵装はミサイル以外に機関砲しかない。機関砲の有効射程距離にまで近づけば、あのミサイルと同じようにバラバラにされるのは目に見えていた。つまり、有効な戦闘能力をすべて失ったことになる。兵士にとっては絶望以外の何者でもない。

『よー待たせたな若造ども』

『こんな珍しいお客さんを手前らだけに独占されたくないね』

顔をしかめていた醇一のヘッドホンに、揚々とした男たちの声が聞こえてきた。聞き覚えのある空の仲間の声。それは航空空母《高天原》から飛んできた増援航空部隊だった。

味方の機はモニターに青色で表示されている。醇一達のすぐ後ろには8機ものF-15J A T戦闘機が迫っていた。

「海藤さんに柳さん……それにみんな……！」

今は戦況を正確に伝えるべきだった。有効な攻撃方法はない。1度高天原に戻って作戦を練るのが安全で確実な方法である事は理性で解っていた。

しかし心強かったのだ。醇一にとって彼らは、5年も10年も前から戦っている本物の戦士達だ。その戦士と共にこの強力な相手と戦えるなら、たとえ無茶な状況でも戦闘空域に残りたい。

『俺達も攻撃に加わる。まず先——うおあつ！？』

そんな未熟な考えが招いた

「かつ海藤さん！ どうしたんですか！？」

最初の犠牲者

バラバラに墜落する1機のF-15JAT戦闘機。

『どうした海藤！ 返事しろ！！』

指令室で豊野が吠えるように呼びかける。しかし返事は無い。ただ強烈な損壊音が聞こえた後に1機のマークがレーダー上から消えた事だけは確かだった。

「（何だ……何だよ、これ……？）」

火を噴いて散って行く仲間の機を見て、醇一はもう言葉すら出なかった。

異常な突風は吹いていない。自爆事故にも見えなかった。

それならいったい何が起きたと言っのか。

「醇一！ 前前ッ！！」

抜けかけていた精神が祕の叫び声によって呼び戻される。正面を向きなおすと、タタリが顔を真っ直ぐ醇一の方に向けられていた。昼間の空でもはつきりと輝いて見える眼光は、まるで彼の戦闘機をロックオンしているかのようにだった。

「くっ……クソがあッ！！」

咄嗟の判断で、醇一は機体を直進させたままぐるりと円を描く様に回転した。その瞬間、タタリの胸部辺りから発せられた赤い閃光が、彼の機体目がけて投射されたように見えた。

「醇一ーっ！！」

ごく近い場所でそれを見ていた祕は必死な叫び声で呼びかけた。しかし醇一の戦闘機は墜ちない。ほんの1、2メートルの距離で赤い閃光をかわしたのだ。

「はあ……はあ……畜生、何だ、あれ……」

グレイアウト

急に無理な機動を行い視界が失血半盲化する。そこに死の緊張が重なり、まともな呼吸をする事すら難しくなっていた。あの赤い閃光、あのビーム兵器のようなものに仲間は撃ち落とされた。そして自分も同じものに狙われ、偶然に守られて回避した。祕の心配だと

か航空隊全滅だとか、そんな整った考えはもう出来ない。

「ダメだ……殺される……」

その声はマイクに吹き込まれ指令室に、増援に来た戦闘機パイロット達に、そして祕の耳にも伝わった。

「醇一！ 醇一、しっかりしろ！ ボクが注意を引くから、先に空域から離脱して！」

醇一が漏らした声色、息の震え方、彼が異常状態に陥っているのは誰でも判断が付いた。中でもいち早く理解した祕は、醇一を助ける為に自ら囀に出ようとする。

「——ダメだ、祕。残るぞ、ここに」

「はあ！？ そう言う冗談言ってられる状況じゃないだろ！ カタカタ震える飛行機を隣で飛ばされてちゃ、こっちが楽に誘導も出来ないっての！」

「んな事は解ってんだよ！ でも見ただろあのレーザー武装、あんなのが直接本州上空に行ってみろ……東南海の防衛線なんか10分も持つか！？ 俺たちがこのクソツタレを止めなきゃ、今日で全部終わるかもしれないんだぞ！！」

「ボクだつて解らない訳じゃねーよ！ でもここで撃墜されてどうするんだよ！ ボクと醇一が残ったつて、タタリを足止めできるつて言うの！？」

「……ってんだよ……解ってんだよそんな事オ！！」
手も足も出ないなら撤退するべきだ。

しかし、自分達の使命は最前線で侵略者から国を守る事。

どちらを取つても正解が見えない。正解を選べない自分にどうしようもなく腹が立つ。

「醇一早く出て！ もう1発来るよ！！」

タタリは首を動かして再び醇一に照準を合わせる。先の回避行動は偶然、よつて再び同じようによける事はほぼ不可能。旋回して避けるにも、対峙する武装はミサイルとは勝手が違う。どう動いてもタタリが放つレーザーの直進速度には勝てない。

——もう、本当にダメだ

そう思うと、自然とハンドルから手が離れかけた。

血の気が引き、グレイアウトしていた視界が更に暗くなる。それを支える気力も残っておらず、醇一は本当の死を覚悟した。

「——ッ!!」

何かが爆発した。自分の戦闘機に着弾したのだろう。もう落ちるばかり。

墜落するなら緊急脱出すれば助かる。そう思って指先で脱出用のレバーを探し、見つけた拍子にそれを下げようとした。

「……………あつ、あ……………あれ……………？」

しかしレバーはなかなか下がらない。重い。まるでロックされたままのようだ。

——違う。墜落警告が無いから、レバーが下りない。

ひと筋の光が見え、醇一は再び顔を上げて目の前の空を眺めた。

そこには黒煙を上げながら苦しみもかく巨大タタリの姿があった。顔は咆哮を上げるように歪み、損壊した肩の部分からは緑色に近い火も噴出している。

信じられない。醇一に限らず、この状況を観測している全ての人間がそう思った。

「醇一！ 上、上！」

秘の呼びかけを耳にし、彼はとっさに空の天井を見あげた。

遠くに見える1つの黒点。だんだんと近づくにつれて、それが機首を真下に向けながら飛んでくる戦闘機である事がはっきり判った。しかしモニターには何の情報も表示されない。

醇一はただ眺めていた。流れ星の様に直進する謎の戦闘機を。

故にはつきり見えた。それが機関砲を放ち、タタリの体を確かに損壊させている状況を。

「効いてるぞ……」

醇一の見ている光景は、ガンカメラによって指令室にリアルタイムで送られている。もちろん豊野と国常も、バラバラになりゆくタタリの姿を目にしていた。

祕は機体の速度を落として水平に保ちながら、高速で移動する戦闘機を眺めて呟く。

「あんな戦闘機……見たことない……」

醇一は同調するように彼女の言葉を重ねた。

「それに速度も機動もおかしい……あんな事、出来たとしてもUC AV（無人航空機）くらいだ」

謎の戦闘機は、普通にパイロットが乗っていたとしたら頭が吹っ飛ぶほどの無茶な機動を繰り返していた。そうしてタタリの虫の息となりつつある攻撃をかわし、反撃には確実にダメージを与える機関砲を食らわせる。

タタリに対抗する者としてはまさに天からの助けだった。しかし現場にいる醇一達にとっては、その嬉しさと同等に気味悪さが広がる。新しいタタリ同士の殺し合いか、タタリ以上の脅威なる存在なのか。それが判らない内は安心して窺う事が出来ない。

醇一達が見守っている間に、謎の戦闘機はついに巨大タタリを半壊させた。そして留めを刺さんとばかり接近すると、機の前端部分がかすかに光を放ち始める。それは1秒もしない間に激しい青色の閃光になり、光そのものが段々と膨らんでゆく。そこから一転、閃光は収縮した後には一直線のビームになって機首から放たれた。

「あれは……！？」

醇一はその様子を、謎の戦闘機にゆっくり近づきながら窺っていた。

ほんの一瞬の出来事に誰もが言葉を持てずにいた。突然現れた戦闘機が巨大タタリと同等か、それ以上の火力で圧倒する。それも単独で。散々鳴き散らしていたタタリは完全に息の根を止められ、崩

壊した残骸は海へと落ちてゆく。

『須佐美、聞いているか』

醇一のヘッドホンに国常から呼び出しの声が入った。

「はっ……は、はい！ 聞こえます」

『国籍不明の戦闘機を追え。状況を観察し、可能なら通信を試みる』

「り……了解、です」

まだ生きた心地のしない彼はぎこちなく返事をしつつ、速度を落として飛ぶ謎の戦闘機に近寄った。ほんの少し高い位置から見下ろしつつ、全体のフォルムをまず観察する。

「確かに……こんな戦闘機見たことないぞ」

大体の見た目は従来のジェット戦闘機とかけ離れていないが、細かい構造が見えてくると一転、本当にこの世界の戦闘機なのか？ 疑わしくなる程異質な見た目をしていた。

『艦長、これは一体……』

ガンカメラから送られる映像を見て豊野も眉を寄せながら言う。

問いかけられた国常はただじっとモニターを眺めているだけだった。

「醇一、何か分かるか？」

彼の後方に付いた祕が訊ねる。

「分かるかつたって……あっ！」

「ど、どうした？」

今まで造形ばかりに気を取られていたせいで、単純な事に気付けなかった。

「日の丸だ……両翼に小さく、1つずつ描いてある……」

「そんなバカな！ 日本の戦闘機ならボクらが知らない訳ないだろ！」

「俺だつてよく解んねえよ！ ほらお前も肉眼で見——」

その時まるで2人の状況を察したかのように、謎の戦闘機は両翼を左右に小さく振り始めた。1番近くでそれを見ていた醇一は、真っ先にある答えに辿りつく。

「バ、バンクだと……」

バンクと呼ばれる翼を左右に傾ける挙動は、太平洋戦争時代の旧日本軍において、僚友機である事を示す1つのサインである。祕はただ風に揺れているとしか思っていなかったが、彼は確信していた。「艦長！ 豊さん！ この戦闘機は味方です！ 今バンク見えただしょ？」

謎の戦闘機がバンクらしき挙動を取った様子は指令室のモニターにも映されていた。しかし、誰も返事をしない。

「豊さん！ これはきつとチャンスなんだよ！ 友軍だって言うてるし、この戦闘機とパイロットを味方に付ければ反攻だって出来るんだよ！」

醇一にとつては死の淵から救い出してくれた存在、バンクを送らずともポジティブにその存在を受け入れる事が出来る。しかし反面、指令室の温度は冷ややかだった。

豊野は声調を落として言う。

『しかし……いくら翼に国籍マークがあつて、今のうちは攻撃してこないにしても、とても安心して本土や高天原の艦内に受け入れる訳にはいかない。そもそも対話する意思を確認できていない』

「ああもう豊さんのアホ！ 頭でつかち！ 俺が通信を試みればいいんだろ！」

『おい待て須佐美！ 誰が許可した！』

もはや救世主である謎の戦闘機を受け入れる、という事は醇一の望みであった。彼は言葉が通じてくれることを信じて呼びかける。

「聞こえるか。こちらは航空自衛隊第1特別防空隊の須佐美だ。我は貴機を侵犯機として排除する意思は無し、対話を申し込みたい。応答してくれ」

口では醇一を制止した豊野だったが、やはり謎の戦闘機の意味は気になっていた。その為しばらく黙って見ていたが、返信は送られなかった。

『勝手な行動は止める須佐美！ 独房にぶち込まれたのか！？』
「事が済んだらどうにでもしやがれ！ 国常艦長、あの戦闘機に着

陸許可を！！」

須佐美が呼びかけると、司令室から音という音が消えた。国常はじつとモニターを眺めて口を一字に結んだままだ。周りのオペレーターや豊野は、どんな意思や意見があっても彼の命令に従わなくてはならない。最高責任者である国常の一存を、醇一は強引に仰いだのだ。

『……国籍不明の戦闘機を高天原に着艦させる。須佐美、通信を送り続けながらこちらに向かって誘導しろ』

覚悟はしていたが、豊野は自分の意思に反する決断に対して言葉を掛けた。

『艦長！ 良いのですかそんな事をして！？』

『大体は須佐美の言う通りだ。あの戦闘機による攻撃が無ければ、我々は遅かれ早かれ巨大タタリに撃ち滅ぼされていたかも知れない。味方になる、ならないはともかく、加勢した理由だけでも聞かないと防衛事案が増えるだけだ』

『しかし高天原に着艦させるのも……』

『本土に着陸させるのはもつての他だ。間接的に対話をするならここが適当だ。本艦の進路を東に取れ。本土から離れた太平洋上で戦闘機を着艦させる。榎名田は誘導する戦闘機の後方に付け。残りの航空隊は広域の護衛に回れ』

間髪のない命令に、豊野はもう上申しようとはしなかった。

第1章その2 その少女の名は

謎の戦闘機は素直に醇一の誘導に従った。しかし彼が何度も送った通信には1度も返信がなかった。それでも醇一は語りかけるのを止めなかった。言葉による返事がなくとも、戦闘機の動きにははっきりと意思が感じられたからだ。

醇一達が空中航行する高天原に近づくと、マーシャラー達が着艦口で誘導の旗を振っているのが見えた。まず手本を見せるように醇一が艦内へ自機を収めると、誘導された来た謎の戦闘機も安定した姿勢で着艦を果たした。

「おい須佐美！」

「お、おいおい、怒るのは後にしてくれよ豊さん」

エンジンが止まった直後、醇一の戦闘機へ1番に駆け寄ったのは豊野だった。そしてコックピットから飛び降りる彼に向かって声を掛ける。

「命令無視は確かに許せんが今は良い。体調はどうだ？ 戦闘機は通信に返したか？」

「いや……ずっと反応なしだけど、聞いてくれているのは確かみたいだ。ずっと日本語で話していたけど、ちゃんと言葉に反応して動いてくれた」

「そうか……今その戦闘機を戦闘部隊が輪になって取り囲んでいる。着艦した後すぐにエンジンは切ったみたいだが、なかなかパイロットが出てこないみたいなんだ」

戦闘機のコックピットを見ると、外からは中の様子が見えない加工がなされていた。

「……そりゃ、小銃を向けられてたら俺だって怖いよ」

制止した謎の戦闘機の周りには30人ほどの艦内戦闘員が取り囲み、中腰になって小銃を構えていた。醇一がそこに近づいていくと、同じく着艦し終わった祕が彼の隣まで走ってきた。

「醇一、あの戦闘機は？」

「まだ黙ってるみたいだ。言葉は通じるみたいだから、呼びかけた方が良くかもしれない」

改めて見知らぬ戦闘機を眺めながら、醇一は戦闘隊員の肩を叩いて退かす。1歩1歩近づきながら咳払いをし、機体に手が触れるほどの位置に立つてから声を掛けた。

「そのー……なんつーか、小銃向けてるのは決まりみたいなもんだ。君の正体さえ分かれば絶対撃つ事はない。だからコックピットから出てきてくれないか？」

やはり反応は無い。中腰の姿勢を続けていた戦闘隊員たちも集中力が途切れ始め、体を小刻みに動かし始める。

秘は緊張感が抜けてきた輪の中に入り、醇一の傍に立つてから小声で話しかけた。

「やつぱりダメか？」

「んー……籠城となると厄介だな……」

彼が唸った直後、なんとコックピットがゆっくりと開き始めた。

肩の力を半分抜いていた戦闘隊員達は照準を1点に揃えて体勢を立て直す。だが醇一はあくまでも落ち着いた姿勢で足首を伸ばし、徐々に見え始めたコックピットの中を覗いた。

「……なっ……え……？」

今度こそ何かの幻覚かと思う。

コックピットの中には、歳場も行かない少女が座っているのだ。女兒というにはもう少し上か、それでも小学5、6年生がいいところだろう。コックピットには2人乗る余裕があるように見えたが、少女以外の搭乗員は居ない。

「こ……こんな子供が、この戦闘機を動かしてたって言うのか？」

コンピュータ制御なのかも知れないが、どっちにしろ彼女が普通の子供でない事だけは確かだろう。

「……………」

少女は自分の意思を以って体を起こした。まず半分瞼が下がった

目をこちらに向けてくる。そしてツインに分けられた髪を右腕でかき上げ、もう片方の手をコックピットの淵にあてる。その動作は非常に緩慢で、スローモーションにすら見えるほどだ。

自分の力でコックピットから降りようとしているようだが、とても2メートル以上ある床へ着地できるようには見えない。醇一以外の隊員も心配の目で見守っていたが

「……ふ、あつ……」

「危ねえ!!」

少女が小さく声を漏らした直後、支えていた手が外れ、体がコックピットから飛び出してしまった。醇一はとっさに駆け寄ると、ちょうど伸ばした腕の中に落ちてきた少女が収まった。

「……………」

「ふう……良かった無事で。もう1度確認するけど言葉は通じるんだよな。な……え、お、おい! コラ返事しろって!」

少女は返事しなくなった。手はだらんと垂れ、半開きだった目も閉じられている。体重なんて有るようで無い程度之感覚だった。作り物のように整った顔から秒刻みに色が抜けていく。醇一はその様子はつきり覚えた途端、血の気が引くと同時に後方へ向かって叫んだ。

「おい救護呼べ! 早くしろッ!!」

《6 時間後》

第1特別戦闘配置が解除され、航空空母《高天原》の艦内は普段の落ち着きを取り戻したかのように見えた。

しかしごく少数の隊員にはまだ張りつめた空気の中に晒されている。整備員たちは収用された謎の戦闘機を調べ、パイロットの少女を保護した救護隊は細心の注意を払って検査と治療を行っていた。

《高天原艦内 某会議室 午後9時30分》

「よう醇一、お前も呼び出されたのか」

扉を開けて入ってきた中年の男が醇一に挨拶した。

「え、なんで大戸さんが？ 俺は当事者だからここに呼ばれたと思うんだけど」

“指定の会議室に集まれ”という命令を受けて、醇一と祕は通常の隊員服に着替えてから会議室に入り待っていた。そこにやって来たのは、高天原戦闘航空隊の隊長である男、大戸^{おおと}仁田^{じんだ}だった。38歳で階級は二佐、つまり戦闘指揮官の豊野よりも上の階級を持つベテランの隊員だ。

「何で意外そうな口ぶりなんだよ。俺くらい偉けりやどこの会議に呼ばれたって不思議じゃないぞ」

と言いつつ大戸は大人の余裕を含む優しい笑顔を浮かべている。

その様子を見ていた祕は少し意地悪そうに口元を上げ

「似た者同士だなあ。先輩ぶりたかったら相応の振る舞いじゃねーとパツとしないぞ」

彼女のツツコみに、醇一と大戸は小さく噴き出して笑った。

それから20分ほど経ってから、入口とは違う壁にある鍵のかかったドアが開かれた。待機疲れしていた3人はすぐさま立ち上がり、扉の向こうから来る誰かを窺った。

まず出てきたのは豊野だったが、彼女はすぐに口を開かず、後ろに連れていた人を室内に入れてから扉を閉め、それから言葉を発した。

「ほら、挨拶しなさい」

豊野が連れてきたのは、間違いなく謎の戦闘機に乗っていた少女だった。救護隊の治療が通用したおかげか今はしっかりと2本足で立ち、1人で歩いている。醇一はほんの少しだけ異星人かと疑っていたが、やはり人間であることは間違いないとこの瞬間に思えた。

「……………はい」

声色も見た目相応だったが、その調子は気味が悪いほどに落ち着いていた。

「……ふう。私の、名前は、草薙、剣」

ぶつ切りな喋り方に醇一、祕、大戸の3人は疑問符を浮かべていたが、少女の顔にはちゃんと喋ろうとする意志が映って見えた。余計な口を挟まず、黙って挨拶の続きを待つ。

「まず、最初に……私が、来た、この、世界、いつ……なん……年……西暦、は……」

吃音でも息苦しい様子でもない喋り方に違和感は取れないが、少女——草薙 剣が訊ねんとする事は伝わっていた。醇一は自分の疑問を押し止めつつ、彼女の質問に答えた。

「西暦なら2022年だけ……」

「こほんっ……えと……私、は……」

喉が整わないのか剣は何度も咳をしている。しかしその音は、机をボールペンで叩く程度の軽いものだ。

「私は……その、19年後……2041年から、来ました……」

余りに突飛な事を言われ、3人が固まる。率直に“そんなバカな”と思う。

だが豊野は真面目に緊張した表情をしており、下手に笑い飛ばすことも出来ない。祕は困惑したまま、確認の問いを投げかける。

「それって、結局はどういう事なの？」

「事実、を……こほん、事実のままに」

声が整ってきたのか、剣は次第になめらかな口調で語り始める。

「正確には……別の世界、別の地球から過去に向かって、遡りやってきた事になります。私はこの世界に、元居た文明の技術を、運ぶために来ました」

大戸は鼻で深呼吸をしてから率直な質問をした。

「つまりどういう事だ？ 元の文明を運んでくるって事は、君の知っている未来の地球がどうかしちゃったって事なのか？」

「はい。2041年、地球の文明はタタリの軍力に圧倒されて滅亡

しました。しかし私は、技術の運び屋として、過去の地球に戻ってきたのです」

彼女の返答は誰もが予測している未来を実際に起きた事の様に語っていた。今戦っているタタリ達に、自分たちが敗北を喫し、地球の文明そのものが潰される。劣勢を肌で感じていた醇一達には重すぎる宣告だった。

「本来はタタリの現れ始める時代に戻って奴らを撃滅させる予定でしたが、41年の技術ではこの時代まで戻るのが精いっぱいだったようです。……でも、目的は変わりません。私も、そして“天照”も、この時代の人間となり、物となって戦います」

はいそうですか、と単純に受け取れない答えに、醇一はようやく訊ねたいと思っていた事を口にした。

「その、君の……剣の言ってる事が嘘だと思ってるじゃないぞ？」

でもいきなり、未来からきてこの時代で戦うと言われても、流石の俺でも頭が追いつかないんだが」

「何の流石かは知りませんが、私の記憶や体、乗っていた戦闘機を調べれば十分立証出来るはずです」

声の調子が完全に戻ったらしい剣は冷静に、そして単調に言葉を連ねてから豊野の顔を見あげた。細い顎をまっすぐ伸ばしている様子に、豊野との35センチの身長差が解りやすく目に映る。

「皆、最初に言っておくが草薙は冗談をかましている訳ではない。

私はこの子の身体検査結果と、持ち込んだ戦闘機の分析結果を見た。率直に……この時代のものではない。特に戦闘機には40ミリ機関砲が2門も積まれている。加えてあのレーザー兵器だ。とても私たちの航空技術力で造れるものではない」

40ミリ機関砲は何十年前から軍用として使われている規格だ。しかし1発の砲弾薬は成人男性の片腕ほどの大きさであるが故に、巨大な攻撃機でしか運用する事は出来ない。戦闘機にそれを2門積むと言うのは、口の中にボウリングの玉を2つ詰めるようなものである。

「あの戦闘機を証拠とし、私たちはこの子を仲間として受け入れる事にした。もちろん戦闘機を対タタリに使う前提でな」

豊野はそう語りながら右手を剣の頭に乗せた。彼女は手が触れると同時に小さく頭を下げると、若干上目使いになりながら3人の方へと向きなおした。その視線を受けた醇一は、更にもう1つ気になつていた事を訊ねる。

「ずっと“あの戦闘機”だとか“謎の戦闘機”って呼んでたけど、あれにも名前はあるんだろ？」

ほんの少しの間を置いてから、剣は真つ直ぐ醇一の顔を見つつ答えた。

「F・0（ゼロ）……呼称名は天照^{てんしょう}。私が所属していた航空自衛隊で、最後に運用された戦闘機」

いろいろ思う所はあつたが、醇一は問いを続けた。

「じゃあ剣は、その天照を……これからも1人で動かすのか？」

常識的に、本来小学生であるような少女が戦闘機を動かすなんてことは有りえない。実際に訓練を積み、実戦を重ねてきた醇一にとつてはなおさら理解の出来ない事だった。

「私は本来制御を担当しています。設計上、戦闘機の操作にもう1人パイロットを要します。先程の戦闘に際しては緊急だったので、私が制御と操作の両方を行いました。その為本来の半分しか戦闘力を発揮できませんでしたが、あのタタリがまだ弱い方だったのが救いでした」

あのタタリが、弱い方だと言うのか。

3人はもちろん、その語りを隣で聞いていた豊野も、あえて声を出さずに目を見張って驚きを表していた。あの戦闘機——天照が、本来持つ力の半分で戦っていたのか。それなら全力だとうなるのか……期待と同じくらいに恐怖すら覚える様相であつた。

しばらく無言で室内の空気が停滞していたが、大戸がそれを破るように口を開いた。

「もう1人パイロットが要るって言ったよな？」

「はい。しかし、誰でも良いと言う訳ではありません。私が制御する側に立つので、不便にも相性と言うものが発生してしまいます」

「じゃあどうやって確かめるんだ？ 機体とシステムの相性ならハッキリするだろうけど、人間と人間じゃ難しいもんな……」

大戸は顎に手を添えて考え込む。フリだけで実際に彼は何も考えていないが、その見当は他の誰にも思いつかない。

「あの、あなた、ちょっとしゃがんでください」

剣はおもむろに右手を差し伸べて醇一の気を引いた。言われるまま醇一が腰を曲げると、トコトコと彼女が歩いて近づく。

「もう少し体を曲げてください」

「お、おう」

醇一はほぼお辞儀をするような格好になった。そして何をされるかと思うと

「——ぎ、ぎい！？」

秘は事態に気付いた途端、喉をねじったような奇声を発しながら口をあんぐりと開いた。

「……！？」

剣は両手を醇一の頬に添え、首を少し左へと傾けながら顔を近づける……」

そしてまだ色気にも染まっていない柔らかな唇が、醇一の口に重ねられた。

第2章その1 ファーストコンタクト

《航空空母《高天原》 上層部 上級幹部会議室

西暦2022年6月10日金曜日 午前10時》

薄暗い会議室の中に国常の声が重く響く。

「では先の条件に今1度同意するか」

彼が見やったのは、会議室の中央に立たされている草薙 剣の姿だった。彼女は第1特別防空隊の隊員服を着て直立不動のまま頷く。

「はい」

彼女は国常の問いかけに迷いなく答える。

周りには数十人のSDC1（第1特別防空隊）幹部員と豊野が、取り囲むテーブル列の外側には醇一と祕が立ってその様子を見ていた。

剣の返事を聞いた国常は、彼女から一切視線を外さないまま言葉を連ねた。

「よろしい。ではこれより草薙 剣を、航空自衛隊第1特別防空隊における特別三尉に任命する。任命期間中は三尉として待遇、そして戦闘航空要員としての優越を認め、これを保証する。伝達は以上だ。これにて本会議を終了する、解散」

ほとんどの幹部員は国常の号令が発せられるとともに席を立ち、警備員によって開かれた扉に向かい退室していった。しかし醇一と祕は会議室の中央に立ったまま動かない剣の様子をしばらく窺っていた。

「……どうする？ 声かける？」

祕は潜めた声で醇一に訊ねる。しかし醇一もどんなふうに話しかけていいのかわからなかった。

「まさか艦長、本当にあの子を使うとはな……」

“未来から来た”と自称する少女、草薙 剣が現われてから8日

後、SDC1および航空自衛隊は、防衛作戦における大きな変更に踏み切ったのだ。

「ほら、さつさと出るぞ2人とも」

豊野は手前の資料を片付けてから醇一達に声を掛けた。戦闘指揮官であるため彼女の資料は抱えるほどの量だった。醇一は鞆いっぱいに詰められた資料の束を差し出され、少し不満げになりながらも黙ってそれを受け取った。

「豊さん、放っておいていいの？」

会議室の仕切りを跨ぎかけてから、醇一はまだ立ったままの剣に振り返り小さく呟いた。

「これから艦長と個人的な作戦会議と言うか、話があるらしい。とりあえず私達は部外者となる。さつさと扉を閉めるぞ」

あしらうように豊野が淡々と言い返すと、醇一は小さくため息をついてから歩き出した。

「わ、わかったよ……」

仕方なく廊下へと踏み出し、警備員に扉の鍵を閉めさせる。しかしその後も醇一は煮え切らない様子のままでいた。その場に立ったまま、扉の淵を眺めて動く様子がない。

「……もう、いつまでそこに突っ立って——」

痺れを切らした祕が醇一を引っ張ろうとしたその時、通路の奥から歩いてきた女性が声を掛けてきた。

「ちよつといいかしら」

白衣を着たその女性は、片手で眼鏡を上げながら落ち着いた声調で言う。少し癖のかかったロングヘアが目立つ彼女はSDC1の衛生科長、一般病院という院長にあたる高官、朝比奈あさひな 智恵一ともえ等空尉だった。

「どうしたんだ朝比奈一尉。そんな皺の寄った顔をして」

最初に返事したのは豊野だった。その声は部下に対する堅苦しい声色ではなく、友達に語りかけるような少しくだけた感じだった。

実際、豊野と朝比奈は防衛大学時代からの同期である。

「まったく……誰が寄らせてると思ってるの。それに須佐美二尉、櫛名田三尉も聞いてくれる？」

「ボ——いや、私達もですか？」

すっかり豊野と朝比奈との話になると思っていた祕は、少し戸惑いながら返事した。

「私の意見は会議に通されなかったから、あなた達に直接聞きますわ。例の作戦計画は本当に可決されたのかしら？」

さらに視線が鋭くなった朝比奈に対し、豊野は態度を変えずに答える。

「否決の余地は無しだ。既に草薙とF-0天照^{てんしょう}がある前提で反攻作戦が組まれている。今日の会議は単純に、草薙自身の意思を問うものだ。彼女は了承したからこれ以上煮詰める事は無い」

濁りなく語る豊野であつたが、聞いている朝比奈の表情は険しくなるばかりだった。

「と、豊さん……？」

空気のひずみに気付いていた醇一は豊野の注意を引こうとした。

しかし、それで朝比奈の不満が解消される訳でもなかった。

「あなた達……人として、そんな事をして良いとも思ってるの！？」

ほど近い場所を歩いていた隊員らが、朝比奈の叫びに驚いて足を止める。しかし豊野は表情を変えずに言い返した。

「お前の言い分も理解していない訳じゃないぞ朝比奈。しかしな、我々は彼女に頼らなければならぬ程悪化した戦況に立たされているのだ。それに戦闘への参加は、草薙たつての申し込みだ。それを拒否する理由はない」

「だからと言って11歳の子供を戦わせて良い訳ないじゃない！あの子の治療をした私が言ってるのよ、なのに作戦部は私のアドバイスすら聞き入れない、そのくせ仕事だけは御立派に荒い注文ばかり……ねえ萌美、あなたからもう1度上申してくれないの？」

「しつこいぞ朝比奈、私だって気が引けない訳じゃない。しかし我々の任務は日本国を、ひいては世界を守る事だ。その為にお前もここで働いているだろう?」

「それでも……!」

「大人が死ねばどの道子供だって死ぬ。……そんな未来を作らないためにも、私は艦長の意見に賛同したんだ。智恵、お前には悪いが今さら上申など出来ない」

「…………ふん、私は主張を変えないわよ。医者としてはもちろん、私のカンが、あの子を出撃させてはいけないって言っている。今は何も思わないかもしれないけど、きつとすぐに自分を疑う事になるわ」

朝比奈は吐き捨てるようにして言いながら醇一達の前から去った。朝比奈の癪癢は珍しい事ではなかったが、改まって“子供を戦いに投入する作戦”について非難されると、冷静に返していた豊野も内心が痛まない訳ではなかった。

その日の午後、醇一は“第5ハンガーに来るように”という命令を受けた。第5ハンガーと言えば航空機を出し入れする事がほとんどないため、実験室とすら呼ばれているさびれた格納庫だ。普段は堀越 夜見などの技術開発員しか利用しないはずだが、今日は手ぶらの醇一と“渦中の子”が呼ばれていた。

「おい、こつちこつち」

醇一がドアを開錠して中に入っていくと、作業をしていた夜見が手を振って彼を呼んだ。

「今日は何の用なんだ? 本当に何も持たずに来たぞ」

「あーだいじょぶだいじょぶ。今日は起動実験だからね」

「起動? もしかしてアレのか?」

醇一はハンガーの中央に鎮座する黒色の戦闘機——F-0天照の機体を指差しながら訊ねた。

「大正解ー。昨日の晩にいきなり実験要綱を投げつけられてさ、それからずっと準備のしっぱなし。おかげでどれだけニキビが出来たことやら……」

「そ、そいつはお疲れさんだな……」

作業服姿の彼女はニキビどころか顔中煤だらけだった。ハンガーの中を見やると他の整備員たちが数十人いたが、大半は壁にもたれかかってダウンしている。彼女の言葉通り本当に夜通し作業をしていたのだろう。

「相当参ってるみたいだな。でもなんで夜見だけそんな元気なんだ？」

整備員と言っても本来の姿は自衛隊員、決してダウンしている彼らが体力錬成を怠っている訳ではない。対して16歳の少女である夜見は疲れた様子ではあったが、何故か顔はにんまりとしていた。

「えへへ、こんなハイテクの塊をいじれるなら寝てられる方がおかしいんだって。しっかりと売れるように現代用の改造を施したんだから」

「それで今から実験って訳か。そうになると剣も必要って事になるよな」

「剣ちゃんならもうコックピットに入ってるよ。ずっと君を待ってたみたいだよ」

そういわれてコックピットを注視すると、機首の方を向いて座っている剣の姿が見えた。キャノピー風防は透明になっており外から中の様子が覗える。

「ほら、醇一もこれを着てはやくコックピットに入ってよ」

「おう……って何だこりゃ？」

10分後、醇一は夜見に手渡されたスーツを着て再びハンガーの中に入ってきた。

「何だよこれマジで……」

普段パイロットが着るのは耐Gスーツと呼ばれるオリーブ色の装備だ。しかし今彼が着ているのは、同じオリーブ色でも体の線がはっきり判るような薄い素材のスーツであつた。普段との違いに慣れない醇一は、少し恥ずかしそうにしながら天照の元へと歩いて行く。「似合つてるよ醇一。おっと……これは写真撮つて艦内員に見せれば売れるかな」

「何さりげなく恐ろしい事呟いてんだよ！ 本当にまじめなスーツなんだろうなこれ……」

「大丈夫、その辺は心配しないで。説明は機内通信で行うから早く乗っちゃってよ」

いまいち意図が解せない醇一は眉を寄せながらもタラップを登り、コックピットの中に入ろうとした。

「……………」

コックピットは普通の複座戦闘機、いわゆる2人乗りのタイプよりも狭い構造をしていた。しかし席はちゃんと2つ用意されており、前の席には草薙 剣が座っている。

「よ、よう」

「はい」

剣も彼と似たような薄いスーツを着ていた。おかげでようやく同じ機に乗るという感覚が湧いてきたが、彼女の機械的な返事にどうやって会話を繋げればいいか困る。醇一がそう考えあぐねていると、機内のスピーカーから夜見の催促が飛んで来た。

『ほーら何してるの。乗り方解らない？』

「後ろの席に乗りやすいのかこれ？ でも狭すぎるだろ」

文句を口にしながら醇一はコックピットに体を滑り込ませる。やはり実際狭かつた。前席に座っている剣の背中とは薄いシート1枚を挟んでほぼ接触している。収めどころのない足は開いて前に伸ばすしかなく、ちゃんと席に収まってみると両足の間に剣が座るような格好になってしまった。

「えーと……剣？」

「何でしょう」

まるでバイクの2人乗りみたいな状態のまま醇一が訊ねた。

「天照つて複座戦闘機……と言うか、これが正しい乗り方なのか？」
剣は前を向いたまま彼に振り向かない。

「天照は単座戦闘機の部類です。私は人間に含まれません」

「へっ……？ あいや、別に天照の事を馬鹿にしたわけじゃないぞ？ だから変な冗談は言わないでくれよ」

「解っています。人間ではありませんが、構造は人間なので相応の感情判断は可能です。《アビオニクサー》として重要な力でもありますので」

「あびお、にくさ……？」

彼が疑問を呟いた直後、搭乗の為に開いていたキャノピーが再び閉められた。するとハンガー内の環境音が一切遮断され、コックピット内はスーツの擦れる音しかなくなった。

『醇一、ちゃんと聞こえる？』

脇腹あたりにあるスピーカーから夜見の声が聞こえる。醇一は返答をしようとしたが、考えてみればヘッドセットもマイクも渡されていない。どうしようかと辺りを見回していると、剣はログを読み上げるように呟いた。

「音声の相互通信を開始。マイクはアビオニクサーの聴覚を使用します」

『おっけー聞こえたよ。伝熱スーツに違和感がないなら、醇一もためしに喋ってみて』

マイクテストをする分には文句なかったが、しきりに交わされる用語について彼が知り得ていないと言うのはパイロットとしてむず痒い思いがしたようだった。

「おいおい、なんか俺を置いてけぼりにしながら実験進めてないか？ 伝熱スーツだのアビオニクサーだの」

『ごめんごめん、今から起動実験をしながら説明するね。剣ちゃん、システム起動お願い』

「了解。システム起動、機能は実験の為制限状態に、方式を単独モードとし、外部制御を補助として使用します」

剣は口しか動かしていない。本来機械を動かすためには錠やスイッチに触れなければいけないはずだが、彼女は一切手を動かしていない。醇一にとってそれは、まるで思念そのものが戦闘機を動かしているように思えた。

「起動確認。この状態を維持します」

『ご苦労剣ちゃん。それで醇一、まず聞きたい事は？』

ようやく質問を許された彼は間を置かずアビオニクスに訊ねる。

「じゃあ夜見、まずアビオニクスって何だ。航空電子機器とは違うのか？」

『んー簡単に言うとな、剣ちゃんがアビオニクスそのものになってるって感じかな。天照は紛れもなく戦闘機んだけど固有の制御システムが存在しないの。そこに制御者であるアビオニクサーの剣ちゃんを乗せてようやく運用できるって訳』

16歳である夜見の年相応な口調と常識からかけ離れた説明は、なかなか単純に解釈できるものではなかった。

「……それをそのまま受け取ると、剣は機械って言う事になるぞ」

醇一は少し声のトーンを下げて言う。人を機械として扱う発想はSFによくある、ゆえにイメージが湧かない訳ではない。その上で彼は想像する。目の前にいる幼い子供を、機械として使わなければならない程に未来の世界は狂ってしまうのかと。

醇一のストレートな問いに、夜見はすぐ言葉を返せなかった。そんな隙間に入り込むように、剣が無機質な声で醇一に語りかける。

「先程から私は人間でないと言っています。私は航空機器制御者として生きているのが存在意義です。なので憐みを抱いているとしたら、それは失礼にあたります。私が天照に乗る意味を否定される事と同じなのです」

相変わらず声から感情は読み取れないが、淡々と紡がれた言葉には人間的な憤りを思わせる部分がいくつかあった。醇一はその差に

戸惑いながらも彼女に弁解の意を伝える。

「べ、別に可哀そうだとかそんな事は……」

「天照を本来の形式で起動させたら、そんな装いは通用しません。私の事を考えてくれるのなら、常に本当の事だけを話してください」まるで見透かされているようにだった。今の今まで醇一は子供を相手に話している意識を捨てきれなかった。しかし彼女は違う。こんな小さい体をしながら今自分が乗っている戦闘機を動かして、誰も敵わなかったタタリを一人で倒したのだ。

「……悪い。言われれば確かに、少し可哀そうだと思わなかった訳じゃない。でも剣をバカにするつもりもないんだ……俺の認識が甘かっただけだよ」

剣は返事をしなかった。相変わらず前を向いたまま、ぴくりとも体を動かさない。それが彼女の「早く次へ」というサインだった。

約30分間、コックピットにおけるアクションは何もなかった。

夜見からはただそのまま待機という事だけを言われ、乗っている2人は座ったまま、ひたすら時間が過ぎるのを待っていた。

『よし、ようやくひと纏まりのデータ回収できたよ』

夜見のやりきったような溜息がスピーカーから聞こえ、醇一はうんざりした声で訊ねた。

「……一体何やってたんだ夜見」

『ひたすらデータ集めだよ。国常艦長から渡させた作戦計画を実行するためには、どうしても高天原からの管制と天照のシステムを合致させないといけないの。それに必要な情報を出来るだけ集めておかないと私が大目玉食らうんだから』

「なるほどな。でもそれだと俺を呼んだ意味がなくないか？」

『パイロットとアビオニクサーは常に影響したりされたりする関係らしいから、多分居るだけでも意味はあると思うよ』

「何だよそのフォローになりきってない返事は……」

『でもこれからの本起動実験には必要になるよ。ねー剣ちゃん』
この時初めて、剣は席に座ったまま醇一の方へと振り返った。

「はい。これから本機動実験を始めますか」

『どの道今日だけじゃ全部のデータを集められないから、非常時のために本起動実験はした方が良くね。準備はいつでも良い？』

「私より醇一の心配をした方が良くと思います」

「……！」

剣が自分の名前を口にした。初めての事だっただけに、醇一にとってはそれだけで驚くべき事であった。苗字でなく名前である事――剣にとってその差は無いのかもしれないが、受け取った彼にとっては意味のある呼び方だった。

『それじゃあ本起動実験を開始するよ。醇一、剣ちゃんの座席の右側にあるパイプを手にとって』

「パイプって……お、これか」

醇一が剣の座席下あたりに手を差し込むと、指先に硬質なものが当たる感触がした。それを引っ張り出すと、何かに接続する為のプラグが付いた管が姿を現した。

『それをコネクターに装着して』

いきなりコネクターと言われてもどこがソレなのか醇一には判断つかない。彼は一人で戸惑いながら装着口を探していると、もう一度剣が振り返って言った。

「へその近くの穴。それがコネクター」

「これかよ！　ずっと何かの飾りかと思ってたぞ……」

こんな調子ではどう接続するかも判るはずなかったが、プラグの先端をコネクターと重ねてみると、思いのほか2つは簡単に固定された。

「パイロットとの接続を確認。本起動準備開始」

再びログを読み上げるように剣が口を開く。彼女の頭が、体が、どんな風にして天照と交信しているのかは醇一にも夜見にも解らない。剣の準備が整うまでは、ひたすら黙って様子を見守るしかない。

った。

「（……なんだ？）」

その最中、醇一は妙な音を感じ取った。

遠くから聞こえる、何かを嚼る音。どこから聞こえてくるのかは判らない。ただ遠くから来るイメージが漫然と感じ取れるだけで、本当にその音が鳴っているかどうかすら疑わしかった。

『了解剣ちゃん。現行の補助システムコマンドはどれだけ通用するかな……』

確証が無かっただけに、醇一は違和感を訴えられずにいた。その間にも夜見と剣の準備は順調に進み……

「最終確認良し、本起動許可を」

『おっけー。ちなみに言っておくけど、ハッチがオンボロで手つかず状態だから、間違っても推力エンジンは吹かさないでね！ 醇一も分ってるー？』

「……お、おう、当たり前だ。大体今の時点で操作方法はまったく分らんからな、俺には動かしようがない」

夜見は天照の本起動を見られるおかげで意気揚々としていたが、

醇一は2つのハンドルを握りながらずっと眉をひそめていた。

『あれー……なんか醇一テンション低くない？ 自分が最新どころか究極の技術が詰め込まれた未来の戦闘機に乗ってるんだから、もっと盛り上がるよ』

「何かそういう気分になれないんだよ。まだ……いやとにかく、するなら早く本起動とやらをしてくれ」

まだ醇一には嚼るような謎の音が聞こえていた。頭のとっぺんからも足の下からも、何かを嚼るような音が聞こえたり聞こえなかったり。それは1秒1秒刻むごとにほんの僅かながら近づき始めていた。音の存在はやがて確証へと変わり、何の音なのかも判断が付き始めた。

「本起——」

少し剣の声が聞こえたかと思った瞬間、頭を抱えてしまうような

騒音が醇一に襲いかかってきた。あまりの音量に剣のか細い声は簡単に吹き飛んだ。暴風の音とも、壊れた電子音とも、人間の叫びとも取れる音。まったく聞いたこともないが、全て聞き覚えのある音が耳をつんざく。彼の頭はますます混乱し、今どんな格好で座っているかという自覚までもがあやふやになってきた。

《——て、……の……み………つ………の……》

入り乱れる音の中に聞こえた人の声。醇一は何とか聞き取ろうと、抜けてしまいそうだった精神を夢中で引き戻し意識を保つ。

《……きつ………う………——って………》

言葉を拾うたびに声の音量は増していった。彼は次第に言葉の意味、そして意思をかすかに感じ始める。

《——けて……》

ようやく単語が聞こえたと思ったその時、全ての音が止まった。

《“ア” アアア——ッ！！ ウウウツ…… ウアアア——！！！！》

金切り声なんて次元ではない、脳を貫くような叫びだ。この強烈な音がかえって醇一の意識を叩き起した。

「止めろッ！！ 今すぐ止めろ夜見！！」

『だっ、どうしたの醇一！？』

「止めろつつてんだよ！ 早くしろよ！！」

『そ、そんなこと言われても、私達は補助しか出来なくて……』

「くっ……畜生、どうすりゃ……！！」

意識はハッキリしていたが、叫び声はまだ続いていた。こんな状態が続けば耳が、脳が殺される。すぐさま醇一は目の前に座る剣に呼びかけだ。原因は天照の本起動による何かと見て間違いないだろう。それなら実質、天照を動かしている剣に本起動を止めてもらうしかない。

「今すぐ止めろ剣！ 実験は中止だ！ 早くしてくれねえと頭おかしくなるんだよ！！」

「どうしたんですか」

剣ははつきりと答えた。その表情はいつも通り無表情で落ち着い

ている。一方謎の叫び声に苛まれている醇一は、苦しみに喘ぐ声で頼み込む。

「はぁ……やく……！ て、ん……天照を止めてくれ……！！」

「解りました。本起動を停止し、とりあえず全機能を落とします」

天照が再び沈黙してから数秒間は、まだ醇一の耳に騒音と叫び声が響いていた。頭が焼き付く直前まで来ていたせい、間もなく恐ろしい頭痛と吐き気に見舞われる。

「うつ……ぼえッ！」

咄嗟に口を押えようとしたが、上がってくる流体を止められるほど醇一には体力が残っていなかった。

「……………」

どろどろになった吐瀉物が自分の太もも、そして目の前に座っていた剣の背中に掛かる。本来なら男女関係なく慌ててしまうような惨状だが、それでも剣は表情をまったく変えないまま、呼吸に苦しんでいる彼の口元をじっと眺めていた。

『ひゃああ大変！ ちょっと早く衛生科の人呼んで！』

夜見はすぐさま救護を呼んだつもりだったが、再びコックピットが開かれる頃にはもう醇一の意識がなくなっていた。

《衛生科棟 治療室 本起動実験より4時間後》

「もう落ち着いたか？」

祕は真っ白なシーツが敷かれたベッドに腰掛けていた。そのベッドに横たわっていた醇一はまだ意識が半濁状態だった。

「あー……お前の鬱陶しい姿は見えるようになってきた」

応急処置を受けた彼はすぐに意識を取り戻したが、未だに体の怠さと不安定な心拍は解消されなかった。治療を終えた今はひたすら安静にし、経過を見守るという段階だ。

その為に案内された1人用の病室には、患者である醇一と見舞い人の祕だけが居た。

「それは結構。ボクだつて別に見舞いに來た訳じゃないぞ。漫画を見る為にお前の部屋に行こうとしたら、ゲボ吐いてお陀仏だつて言うもんだからここまで來たんだから」

「漫画くらい勝手に入つて読めばいいだろうが。怒つたところで考え直す気もないだろ」

「まあね。……それはともかく、本当に何があつたの？」

祕はいつものくだけた調子から、真剣な声色に変えて醇一に訊ねる。その改まつた態度に彼もあえて聞き返すような事はせず、通じ合つた意思のままに自分の言葉を口にする。

「實際俺にもよくわかんね。パイロットとして天照に乗り込んで、剣が本起動を始めた途端に、俺の頭の中でとんでもない騒音が鳴つたんだ。それで俺をこの様にするんだ、どの程度の酷さかは想像つくだろ」

「乱暴な例えの振り方だな……。でもさ、午前に朝比奈さんが言つていた事が本当になつてるし……。色々気にならない？」

「剣と天照を作戦に使うと悪い事が起きる……。……つて言つてたアレか？」

「うん。朝比奈さんは癩癪任せの文句を言つてただけかもしれないけど、ボクは単純に剣の存在が気になるんだ。見た目も体も子供なのに、妙に落ち着いてて戦闘機まで動かせるとか」

「自分で言つてて悲しくならないのか。見た目も体も子供つて」

「うっせーバカ殺すぞ！ 病人じゃなかったら枕に穴が空いていたからな！」

「そういう態度の事を言つてんだよバカめ」

重苦しい空気や話は耐えられない、と言うより、互いに交わすにはむず痒いものがあつた。再びくだけた調子になつた祕は勢いに任せて“あの事”について切り出した。

「そう言えばさ、あれつてやつぱりファーストキスなのかな？」

「何だよいきなり、あれつて……。あ、アレか！？」

醇一にとってキスと言えば1つ心当たりがあつた。それは初めて

剣と会った日、事情を説明していた彼女は醇一の元へと歩き、手を添えておもむろにキスをしたのだ。あまりに突然かつ誰も予想していなかった行動に、周りにいた祕や当事者である醇一もしばらく動けず、唇が触れあった時間は10秒近くにも及んだ。

「さ、さあな……っ！か、俺の初めてとかお前に関係ないだろ」

「はあ？　ボクは剣が初めてかどうか聞いたんだけど」
「え？」

しばらくの沈黙を置いて

「ぶっ、やっぱりお前そういう経験ないんだ」

祕は口元に手を押さえて小さく噴く。

「いいだろ別に！　俺航学に入るまでずっと男子校だったし！」

「あーまた墓穴掘った。ボクは“お前に関係ないだろ”としか聞いてないけど。ぷぷぷ、悲しい男ですなあ」

「人の事いえる口かガキンちょが！　それに剣のファーストキスなら、それこそ俺たちに関係ないだろ」

「男と違って女の初めては特別だしね」

「へっ、男も引くようなガサツっぷりのお前が女を語るとか。ギャグにもなんねえぞ」

「あんだって！？」

ベッドに腰掛けていた祕は体をよじらせ、固く握った拳を枕元に押し当てた。耳の近くに風音を感じた醇一は目を見開きながら言い返す。

「俺が不自由だからってやりたい放題だなお前！」

「ったくそろそろ起き上がれるだろ。ほら手貸しな、無理してでも座る姿勢に慣れないと回復も遅れるぞ」

「まあ、確かに……」

祕は彼の両肩を引いて上半身を起こす。無理に力を入れないよう起き上がった醇一は、完全ではないものの体調が回復し始めている事を実感した。

「何か楽に呼吸が出来るようになってきたな……すうー」

醇一が深呼吸をしている様子を見ながら、ベッドに座りなおした祕が小さな声で訊ねた。

「……でもさ、やっぱりボクとしても剣の事は心配に思っただよ。あんな子供が突然お前なんかキスするなんて普通有りえないじゃん」

「……それは納得していいのか、しちゃダメなのか？」

「とにかく普通じゃない事は確かだろ、まだ11歳なんだぞ？ だから醇一もさ、あの子がちゃんとここで生活できるように気を使っ
てあげた方が良く思っ
てさ。お前に懐いてるみたいだし」

思いのほか現実的な提案が飛んで来ただけに、醇一は少し目をキョロキョロさせながら返す。

「確かに……懐かれてるかどつかは分らないけど、俺もそういう事
考えないといけないんだよな……」

そう考えてみると、朝比奈さんの訴えも乱暴ではあったが、子供を大切に
する意識では自分たちよりも大人だった。彼はそう振り返りながら、再び上半身を倒して横になった。

第2章その2 本領発揮

《同病室 秘訪問から7時間後

2022年6月11日土曜日 午前2時》

醇一は普段から溜まっていた疲れを、今になってしみじみ感じていた。SDC1として高天原に乗り始めてから半年間休まる日は無い——という程でもないが、それでも丸1日休めるなんて事は1度もなかった。全ては非常時と言う状況に押し流され、自衛官としてのプライドが募るストレスに理由を付ける。まだまだやれると言う自信こそあったが、いざ倒れてみれば体の脆さを改めて知ることになる。

「1度や2度じゃねえんだけど……こんな事」

いつだって自分に鞭打ってきた。その度倒れても、何とかして戦闘機に乗り続けてきた。

彼は横になったまま病室の天井をじっと眺める。窓からは月の光が差し込み、消灯されていても天井の模様が細部まで見えた。

「須佐美、入るぞ」

その声が聞こえた瞬間、醇一は無意識に背筋をぴんと伸ばした。重く静かで迫力のある声……もはや心当たりを探すまでもなかった。「か、艦長!？」

開かれた扉の向こうには皺の寄った顔をさらに顰めた国常の姿があった。彼はいつもの正装で病室内に立ち入り、醇一のベッドに近づいた。

「須佐美、意識はあるようだな」

「ええ……10時ごろには歩き回ったので、朝目覚めれば復帰できるかと」

「それなら十分だ。今すぐ着替えて出撃の準備をしろ」

一瞬国常の言っている事を理解できなかった。醇一は瞼をぱちく

りさせながら何度も彼の言葉を心内で復唱し「い、今からですか！？」と驚きを返した。

いくら人手が足りないとはいえ、高天原の艦内には7000名もの隊員や環境整備員がいる。その内の航空要員、とりわけパイロットは常に70名もの人員が保持されている。労力の振り分けを考えなければ、醇一が動けなくてもそこまで問題ないはずである。

「でもあの、言い訳するわけじゃないですけど……不完全回復の僕が出なくても他の奴らを出撃させれば」

「そういう訳にもいかなかった。現在“第1特別戦闘配置”を発令している。稼働航空戦闘部隊は30名が心神、海神、屠鷲で出撃した。残る航空戦闘部隊も既に出撃準備が整っている」

「だ、第1配置を発令するって事は……」

「ああ、最初にお前と櫛名田が相手した“カテゴリーエラー”のタタリが現われた。それも前回よりも数段厄介な相手だ。今すぐ阻止または撃破しなければ高天原を撃墜される危険性すらある」

前回の相手というのは、9日前に現れた巨大タタリの事だ。暴風を操って戦闘機の航行を阻害し、ミサイルすら風壁で破壊する能力を持った敵。その戦況を見た者全員が、よく見るタタリとの差を目の当たりにしていた。

その敵——いわゆる1番目に現れたカテゴリーエラーは、未来からやってきた剣と天照によってようやく撃滅された。つまり、今は天照の戦闘力なしにカテゴリーエラーを倒せないという事になる。「それってつまり、僕に天照を動かせと……そうなるんですか？」「説明するまでもない。草薙はお前がパイロットでなければ動かせないと言っている」

「でも……僕は本起動実験に失敗してこの状態なんですよ？それに草薙を納得させれば他のパイロットでも……」

不完全な体調で空を飛びたくないと言うのは、決して仕事放棄ではなくパイロットとしての責任に由るものだ。1機何百億もするモノを扱うのだから、中途半端な状態で整備する事はもちろん、動か

すこともあつてはならない。

しかし今の醇一には他のためらいもあつた。天照に乗ればまたあの叫び声を耳にするかもしれない。それだけの理由で搭乗を拒むほど、午後の体験は強烈なものだった。

少し間を空けてから国常は体を出口に向けて歩き出した。そして扉の前で立ち止まり、首を醇一の方へと向け

「何か勘違いをしているようだからしつかり言っておく。これは命令だ。既に天照と草薙は第2ハンガーで出撃準備をさせている。格好はそのままでもいいから、今すぐハンガーへと向かえ」

と言ひ残し国常は立ち去って行った。

取り残された醇一は急に聴覚が澄み始めたのを感じた。通路の遠くから慌ただしい足音が聞こえる。艦内全員が無条件で戦闘配置、または強制行動を課される第1特別戦闘配置となれば当然だった。

《宮城県 牡鹿半島付近上空 大戸先遣飛行隊

同日 午前1時55分》

夜を照らす月の光は太平洋の波に反射してきらきらと揺れている。宮城県の北部は既にタタリの前線となっているため、ほとんどの県民は仙台空港より南の土地に退避している。街はほぼ無人となっており、上空から窺えた宮城の夜景も今は昔の光景だ。

大戸 仁田率いる10機の先遣飛行隊は、福島県の太平洋沖上空に浮かぶ航空空母《高天原》から離艦して牡鹿半島を目指していた。事態を受けて出撃した先遣隊はベテランの面々が揃っていたが、その中にはまだ新人扱いである祕の機もあつた。

「大戸さん、よろしく願ひします」

「なあに変にかしこまるな櫛名田。どうせ戦火に飛び込んだら何考えもおっつかないぞ。今日は兄貴がいないからな」

「じゅんい——ごほっ、須佐美の事ですか？ でもあいつなんかまだ、大戸さん達に比べたら新人に毛が生えたようなものですよね」

「否定はしねえかな。でも奴は運転が荒っぽい分、それを制御しようとする力と伸ばす力に長けてんだ。伸びしろはあるんだぜ」

「へー……余計に僚機でいる事が不安になりますね」

「はは！ 慣れちまえばお前の技術も上がるつてもんだ。成長を確かめるには、今日も今日とて生き残らなきゃな。氣い締めていくぞ野郎共！」

スラウターイーグル

F-15 屠鷲に乗っている大戸は機体を右にバンクさせながら高度を下げる。F-3 心神を操縦する祕と数機の隊員、F-4 海神かいしんに乗って後を追う隊員達もこれに続く。

『全機、音声通信およびシステムに不備は無いか』

ヘッドセットから指令室にいる豊野の声が流れてきた。各々は通信状況を確認してからコールサインを以って返答する。

『よろしい、では改めて戦況を説明する。高天原は監視巡航のため福島県の東海上を移動していたが、その際にタタリの軍勢をレーダーが捉えた。さらに詳しい解析を続けた結果、軍勢の中心にカテゴリーエラーのタタリが居る事が判明した』

カテゴリーエラーという名称に関しては既に隊員達へ説明が行き渡っている。つまり今その説明を受けている祕達は“我々の力では対抗出来ない敵が現われた”という宣告を受けたようなものだ。その相手に対しての先鋒なのだから、死への緊張感はより高いものとなる。

『まず確認された通常のタタリについては、軍勢おおよそ100、形状は小型飛行タイプ。こいつらに対しては君達の武装で対抗出来るが、厄介な機動力を持つので無理をせずマニュアル通りの攻撃に努めろ』

祕は真っ直ぐ目標の空域を目指しながら、ヘッドセットを通して豊野に訊ねる。

「豊野三佐、カテゴリーエラーのタタリについては？」

『存在している事は確かなんだ。だが目立った行動が見られないおかげでそれ以上の判断が出来ない。刺激すると言うには変だが……』

小型飛行のタタリを潰しながら様子を窺ってくれ。頼む」

通常なら命令を下すだけの豊野が言葉の最後に“頼む”と付け足した。その小さな変化にいち早く気付いた大戸は、まるで緊張感のない揚々とした声で言った。

「心配はいらないぜ豊野、こいつらは小物に落とされ程やわつこい戦線を抜けて来た訳じゃないからな。そうだよなおい！」

大戸の掛け声に応える通信が飛び交う。確かに歴戦のパイロットが揃ってはいるが、誰でも戦いに際しては恐ろしい事に変わりなかった。死への恐怖を抑えるには無理にでも意識を高揚させなければならぬ。その点をよく知り得ている飛行隊長の大戸は、仲間を殺さないための態勢作りに努力していた。

「ゲート1より全機へ通達。目標をレーダーで確認、戦闘パターンは《雷雨》、各自戦闘用意。指令室へ、我は攻撃行動の許可を待つ」大戸は硬い口調で自分のコールサインを口にし、飛行隊に命令をした。命令内容はもとより、あえて声の調子を変えたのは、各機に“最後の覚悟を決める”という意思の伝達でもあった。

指令室で見守るオペレーター、ハンガーで待機しているパイロット、そしてタタリの軍勢に向かっている飛行隊。全員が張りつめた緊張の中、ついにその時が訪れた。

『開眼反応を確認！ 全機攻撃を許可する！』

空中に浮いていたおよそ100機の小型飛行タタリが一斉に、体の半分にも及ぶ大きな目を開いた。その眼光は夜空に点々と浮かび、全体が帯の様になって祕達を待ち構えていた。

「生き残ったら明日の晩飯は12階の焼肉屋だ！ 俺が全部おごつてやるよ！！」

そう叫んだ大戸は全力でアフターバーナーを吹かしタタリの帯へと突っ込んでいく。祕も後を追うように前進し、他の機はそれぞれの役割を押さえながら散開した。

タタリは大戸達の行動を受けて間もなく攻撃を開始する。大きな眼の下にある穴から鉄塊の機銃を撃ち出し、射程内に入ってくる大戸の戦闘機を墜とそうとする。しかし威力が足りず機体面を貫徹しない。それでも何千発と食らったり、弾が空気吸入口インテークに入りすぎると戦闘機としては致命傷に至る。が、それにも関わらず大戸は全身を続けた。

「ゲート2、ミサイル発射！」

大戸の僚機となっている祕は、発射トリガーを引いてF-3心神からミサイルを発射する。兵器庫ウェポンベイに格納されていた空対空ミサイルが火を噴いて直進し、滞空するタタリの間に突っこむと瘴気を感じて爆発した。爆風を直に食らったタタリは目を閉じてそのまま海上に墜落する。

「行つけええっ！！」

今度は祕もタタリの帯に向かって直進する。エンジンから青色の炎を全力で吹かしながら矢のように帯を突き抜けると、残存するタタリ達は祕の尾を狙って追撃を始めた。

「オラア固まりなすったぞ！　まとめて決めてやれッ！」

大戸が命令を下すとタタリ達よりも遙か上空に移動していたF-4海神の攻撃隊が、装備していた航空爆雷を一斉に投下する。何発もの爆雷は無誘導のままタタリの帯に投下され、瘴気を感じた瞬間に猛烈な爆発を起こした。

『タタリの軍勢90パーセントの損耗を確認。皆よくやった』

豊野は少しだけ安心した口調で戦況を伝えた。ひと段落の役割を終えた祕達は喜びを小さく口にしながら、牡鹿半島を北に抜けつつ編隊を整えようとしていた。爆煙晴れぬ空域を後ろに全機が同じ高度へと入ろうとしたその時――

「キイイイイッ！！！」

祕の耳に甲高い鳴き声が聞こえてきた。

「な、何です今の！？」

『どうした祕、何か聞こえたのか？』

ヘッドセットに問いかけた祕に豊野は少し動揺しながら返す。どうやら通信に強烈なノイズが入ったわけではないらしい。彼女たちの装着しているヘッドセットは、音声通信を阻害されないよう自機のエンジン音までもシャットアウト出来るほどの気密性を保っているはずだ。にも関わらず聞こえる声という事は、それ程のエネルギーを持つ生物が居ると判断できる。この場合においては難しい推測でなかった。

「隊長、後ろからひかっ——」

「おいどうした！？ 菱田！！」

編隊の最後方にいた戦闘機が突然異常を発した。とつさに隣を飛んでいた機が肉眼で状況を確認すると、問題を起こした機が火を纏っているのがはっきりと見えた。

「スクエア1応答しろ！ 大戸、状況の確認を！」

「言われんでもやってらあ！ 多分モノホンがお出でなすつたんだろ！？」

大戸は再び編隊を散らせる。そして背後へと振り向く様に旋回すると、洋上に浮かぶ巨大な影が視界に映った。

「な……何だあれ……」

祕は小口を開けたまま呆然と呟く。他の隊員たちも肉眼で見える光景を疑い、映像を受信した指令室内でもざわめきの声が湧いていた。

「あれが、カテゴリーエラーのタタリ……」

同種の敵はつい9日前に見たはずだったが、その造形は全く異なる。体は小型飛行タタリを巨大にしただけのように見えるが、体の各所からはうねうねとした触手が10本伸びている。先端は爪のようなものが3本付いており、その根元にあるオーブラしきものは淡い光を放っていた。巨大な目は白色に発光し、まるで満月をそのまま体に納めているようにすら見える。体長はおおよそ50メートルほどで、数キロ離れた遠方からも形がはっきりと確認できる巨大な体をしていた。

「くっ……スクエア1緊急脱出を確認、機体は洋上に墜落した模様、救出班はすぐ現場に向かえ、念のために海自の潜水艦にも出動要請だ。そして新たに巨大目標をカテゴリーエラーとする。全機、距離を保ちながら本土接近を阻止せよ」

だがそれは達成不可能な命令であつた。発令した豊野自身もそれは解っている。

現在出撃している戦闘機の武装ではカテゴリーエラーに対して有効な打撃を与えられない。与えたとしてもタタリの注意を引いてしまい、先の戦闘機と同じように撃墜されてしまうだろう。

「了解了解……要は離せつてこつたな。全機ここより東に移動しろ、あとは打撃を加えてタタリの注意を引き、なるべく太平洋の東へひっぱりこむんだ。何はともあれ対抗出来なきゃ時間を稼ぐしかねえ」

大戸の口調が硬くなり始めたことを全員が察知する。こうなると判断の迫いつかない飛行隊員達や、表情の窺えない指令室のオペレーターも、現場の状況がいかに悪化しているか想像せざるを得なくなる。攻撃の成功により1度は緩んだ緊張感も再びキリキリと張り詰め始めていた。

「こちらはカテゴリーエラーの映像・成分分析を進めているが……まだ有効な戦術を見出せない。反撃してくる様子が無いのなら多方向から監視を続けてくれ」

「本丸を目の前にしてお巡りさんたぁ心地良くないが……仕方ない、さっきの命令を踏まえて監視行動を続ける」

大戸飛行隊全機が東に移動すると、ようやくタタリは体を動かしてゆっくり大戸達を追う。その速度は数十キロという緩慢なものだったが、後方カメラで常に様子を追っていた祕がもう1つの挙動を目にした。

「た、タタリに動きが！」

豊野は受信し続けている映像に食い入った。こちらに向いているタタリの目が充血し始めたのだ。次第に眼光そのものが淡い赤色になり、瞳と思われる黒の部分も縦長に細くなつた。

「てめえら警戒しろ！ 何ブツ放してくるか分らんぞ！！」

大戸の掛け声で隊列が大きく乱れる。いよいよ以って反撃となると人間はあらゆる惨状を想像してしまう。ハンドルを握る手はハッキリと震え始め、骨をきしませるGを纏いながらも大きく旋回して必死にタタリの視線を欺こうとする。

「キイイ——アアッ！！」

再び轟く咆哮。次の瞬間、タタリの下腹部が大きく割れてゴマ粒のようなものが大量に飛び出してきた。

『全機、再び小型飛行タタリの反応を確認した！ 数が特定不能だ……少なくとも一気に200機は出てきたぞ。全て飛行隊の方に向けて前進している！』

指令室のレーダーにはタタリを表す赤色のドットがびっしりと現れた。誰もが口をあんぐりさせるような図面はやがて1本の線となり大戸飛行隊を追尾し始めた。

「大戸さんタタリが子機を生んでます！ 全てさっきの小型飛行タタリと同様のタイプ！」

「最初の100機は撒き餌だったのかよ！ クソッ……各自敵を排除しろ！ 本番はこれからだ！！」

勢いづけるために大戸の大声がヘッドセットから全機に伝えられる。しかし戦うと言っても敵は空を覆い尽くす程の量が攻めてきている。速度をおとせば後ろを噛まれ、反転すれば機体を覆われ行動不能になる。

「もうっ……もうッ！」

秘は力及ばぬ悔しさに奥歯を噛み締めながら機首を上げる。他の機は高度を下げたり左右にロールしたりしてタタリの軍勢を散らすとする。しかしどの判断も運任せに近かった。結局は誰が先に食われるか（……）が問題であった。

それでも大戸は撤退命令を出せない。タタリのマークを剥がさなければ、カテゴリーエラーのタタリはもちろん200機以上出現している子機も高天原に連れて帰ることになる。母艦への攻撃は本土上

陸と同等に避けなければならない。

一番先に子機の軍勢が狙ったのは祕のF-3心神だった。上昇時に速度が落ちたのを察知したのか、特に早い数十機の子機が加速を続けて祕に迫る。

「何やってんだ櫛名田！ 反転してさっさと高度落とせ！」

大戸は必死に呼びかけたが、後方カメラを見続けていた祕は既に気が動転していた。ただ敵が迫る脅威しか目に入らない。逃れよう逃れようとアフターバーナーを吹かしてみるが、なおもタタリは祕戸の距離を詰める。

「来んな……来んな……来んな来んな、来るなよお！！」

『落ちて着け櫛名田！！ まだ被弾もしていないだろ！』

大戸の声に加え豊野も彼女に呼びかける。しかし祕は機首を上げたまま、それ以上の行動をしなかった。しかしこの場に、祕を助られる機はない。

——祕、

パニックで声を受け付けなくなっていた祕の耳に、真っ直ぐ入り込んでくる1人の声。ふと気を取り戻した彼女の目に、何かが一瞬で通り過ぎるのが見えた。

「じ……醇……」

何が起きたのかは解らない。でも耳元で声を掛けてくれたのは、確かに彼の声だった。

「——ストーム1、攻撃開始」

祕の後方でタタリが爆発した。そして数秒経ってから彼女の耳に、巻き上げるような機関砲の音がわずかに聞こえた。

「あのバケモノ……」

近くを飛んでいた大戸がつぶやく。そこに何かが飛んでいる事は解るが、あまりに速過ぎて形を正確につかめない。指令室も同様に混乱している所に、その機からの通信が入ってきた。

「みんな海面すれすれの高度まで下がって。あとは俺が片付けます」
間違いない。醇一の声だった。まだ天照を管制する能力が無い指令室では、さっそく高速移動する物体に天照のマークが付けられた。

「何やってたんだ須佐美！ 天照を動かせたのか！？」

「ああ豊さん。正直不安だったけど、もう1度乗ってみたら簡単に動いてくれたんだぜ。な、剣」

「目標を放っておくと更に子機のタタリを生産します。早急に攻撃を」

醇一はいつもの調子で語り、そして剣も変わらぬ声色で呟く。

2人が乗ったF-0天照はタタリの子機、母体の注意を引いた。まだ生まれ続ける子機は天照を必死につけるがまるで速度が追いついていない。ハエを振り払うように機体を翻すと、天照はロール状態のまま40ミリ機関砲を開放する。固まって動いていた子機達は砲弾が接触するたびにプチプチと壊れ、わずか2分後にはほとんどが海に浮いていた。

「母体を確認、十分に接敵した後^{いつかほう}に光火砲の準備を」

「了解剣。豊さん、このレーザー兵器は39式光火砲^{こうかほう}って言うらしいぜ」

天照そのものの機動もさることながら、醇一の適応力と声の余裕は、その様子を見ていた全員が驚愕の念を抱いていた。誰も兵装なんて聞いていない。思考の線が1つズレていた。ほとんどの隊員は絶望的状况に戸惑い、そして諦めの念すら抱いていたのに、彼はこれからシヨでも行つかのようなテンションでタタリの母体に突っ込んでいった。

「皆息切れしてるみたいだし、一撃で決めようぜ」

醇一の誘いのような提案にも剣は自分の調子を変えない。

「一撃も何も光火砲は1度の作戦中に1発しか撃てません。固定射線なのでちゃんと近づいて照準を当ててください」

もはや2人の、1機の独擅場だった。カテゴリーエラーのタタリはようやく慌て始めたのか、今までよりも早く触手を動かして爪を

天照に向ける。その根元にあるオーブが激しく光り始めると、青白く光るビームがいくつも発射された。

「おいみんな！ 俺のケツに気を付けてくれよ！」

天照は直進したまま、空気の壁を腹で擦るように機体を回転させ、何発も襲ってくるビームを全て避ける。目標を失ったビームは後方数キロまで伸びると、エネルギーが放散されてフツと消えた。

「必中射程に到達、光火砲安全装置解除、今しかありません」

「よーっしや見てろよクソツタレ！ これは今までのお礼だ、遠慮せず受け取りやがれ！」

醇一は光火砲のトリガーボタンを押しながら両手に握ったハンドルを全力で引く。そして次の瞬間機首から赤みを帯びたビームが発射された。光線はタタリのビーム攻撃に似ていたが、口径は天照の方が数段上だった。

「……命中」

剣はハンドルが引かれる直前にそう呟いた。

夜の闇に閃光が走った瞬間タタリは大爆発を起こした。発射、推進、着弾などというプロセスは無かったように窺えるほど天照の光火砲は速かった。その威力は一目瞭然、空中に浮いていた縦50メートルの巨体が、撃ち抜かれるどころか砕け散るようにして夜の海に消えていった。

加速していた天照は一気に速度を落とし、カテゴリーエラーのタタリが浮いていた空域に進む。時速1200キロ、500キロ、120キロと段々に速度を落とし、そして牡鹿半島を見下ろせる空まで辿りつくと遂に浮いたままで停止した。タタリの墓を見下ろすかのごとく、戦闘機は静かな排気音を鳴らしながらその場で方向転換する。

「任務完了。大戸さん、俺牛肉嫌いなんで8階の寿司屋に行きたいんですけど」

結局食事は12階の焼肉屋になった。

「ちえー、俺軍鶏が出てこないと許さないから」

「しょうがねーだろ醇一。多数決なんだし、慰労会は焼肉と相場が決まってるんだよ」

あまり広くない焼肉屋の店内には15名ほどの隊員が集まった。

本当は倍の人数が集まるはずだったが、警戒水準がさらに引き上げられた現況のSDC1では揃う事が難しかった。

「うーみんな勝手に食っていいぞ。ただ勤務時間的にリミットはあと1時間半だからな」

店の奥には6人用の卓が4つ並んでいた。醇一と祕、そして大戸は一番左の卓に座り、次々に運ばれる肉やら野菜を焼いては口に運んでいた。

「おい祕！俺の軍鶏とんなって！」

「こっちのカルビ生焼けだけどあげるよ」

「牛肉嫌いつってんだろうが！つーかお前とつくの昔から知ってるだろ」

「今のボクは鶏肉気分なの」

「安かねーんだぞ軍鶏は！もう……大戸さんちよつと支援してーってあんたも食ってるんかい！」

「おう、初めて食ってみたけど全然違うな。なかなかイケる」

卓上では軽い戦争が起きていた。運ばれてきた肉を消費しなければ次の皿は来ない。しかし好きなものをしっかり食べるには口に運ぶ量を減らさなければならぬ。だが待っているのはタイムリミットが迫る。いかに早く食べるか、効率よく食べるか、各々の判断が立ち込める煙の中で交わされる。薄いオレンジ色の照明がぼうつとした灯りになり、油を浮かせて照る肉を静かに映す。互いに様子を窺う。1つでも焦がしたら食べ放題のルールにより卓ごと排除される。目的を極限まで狙い続ける人間が揃えば、何をしていても戦いは始まってしまふものであった。

「あつ何しやがる醇一、俺の牛タンを」

「タンだけは好きなんだ。悪いね大戸さん」

醇一は小さく鼻を鳴らして獲物を口に運ぶ。狙いを奪われた大戸は眉間にしわを寄せつつ、皿に添えられていた野菜を網一面にばら撒いて処理に出た。その時、しばらく静かだった店員が「いらつしやいませー」と元気なあいさつをして客人を案内してきた。

「えーと……ここでもいいのか？」

少し戸惑っている彼女の顔を見た隊員達は肉に凝らしていた眼力をパツと解き、タレや汁がついたままの口を開いて体の動きを止めた。

「おーおー豊野、こっち座れよ。お前のために一つ空けていたんだからな」

「あ、ああ……そっち行く」

店に入ってきたのは戦闘指揮官である豊野 萌美だった。仕事に追われているのも1つの理由だが彼女は普段から慰労会などに出るタチではなかった。そのせいか大半の隊員は驚いており、彼女もまた場違い感を覚えて少し顔を伏せている。

大戸は空けていた左隣の席を叩いて彼女を呼び、応えた豊野はゆつくりと腰を下ろしてちよこんと席に座る。まるで借りて来た猫のようだったが、その様子を見て驚いていた醇一も祕も、かえって無理のない態度で接する事が出来た。

「にしても珍しいなー豊さんがこういう会に来るって」

「べ、別に目的なく来た訳じゃないぞ。ちゃんと仕事として、皆に言わなければならぬ事もあるし……」

豊野のぼそぼそとした声は周りの騒音にかき消されそうになる程小さかった。空間の熱気はもちろん、大勢と食事する事に慣れていない彼女にとっては、余計にいつもの様な乾いた態度で居られなかった。

「まあー豊野さん、ボクがいったい焼いてあげますからどんどん食べてくださいよ」

「おい祕、豊さんにつぎ込んで自分の肉を回そうとしてやがるな」

「何だよ文句あるのか醇一？」

「ある訳ねーだろとつとと焼け。あと30分しか残ってねーぞ」

そうして出来た網上の光景を見て豊野が呟く。

「な……何だこの玉ねぎの海は……」

時間が過ぎるのはあつという間だった。そして豊野が場の空気に交じるのも難しい事ではなかった。ずっと醇一達と格闘していた大戸は箸を休め、ぎこちなく食事する豊野に何気ない話を振り続けていた。いつしか彼女に違和を感じる隊員は居なくなり、日本酒を少し口にした豊野は饒舌に語る事が出来ていた。

開始から1時間半が経ち、店員が大戸へ静かに時間切れを知らせる。すると彼は事前に打ち合わせていた通り、豊野に閉会の挨拶を任せた。

「みんな、時間になったから箸を止めると共に聞いてくれ」

集まりで来た隊員、そして個人的に店を訪れていた艦内員までもが彼女の方を注視した。

「昨日の牡鹿半島での戦闘、本当にご苦労だった。戦闘機は1つ失ってしまったが、菱田は今こうして元気に食事しているから、それはそれで良かった」

奥の卓で食事していた菱田は少し気恥ずかしそうに頭を掻いた。周りの男性隊員がその様子を見ると、調子に乗るなど笑顔でいじくる。

「これはさつき出た結果だから……皆はまだ知らないだろう。それは昨日の戦闘結果と、我々の確かな記録が明確なものとなって現れたんだ」

一体何かと誰もが想像を巡らせる。醇一と祕も互いの顔を合わせ何の話かと小首をかしげていた。

「以前までのタタリの前線は、山形県と宮城県にまたぐ国道47号線とされていたが、おそらく先の戦闘による影響で岩手県の北部ま

でぐつと前線が下がった……これは、我々が、タタリに初めて脅威を示す勝利を収めた結果だ」

話が飛び過ぎて、ないしは想像がつきにくくて、聞いている隊員達はまだ無言のままだった。リアクションが低いと察知した豊野は咳払いをしてから言い直す。

「つ、つまりだな！ 我々は負けぬと誓ったが、勝てぬとも覚悟していたこの戦争に……勝てる希望が見えてきたという事だ！」

しばらく物音が一切消えたような沈黙が流れた後――

「……うおおお——ッ！！」「」

男達は手を振りかざし、女達は互いに抱き合って最高の吉報を噛み締める。

醇一は首をかしげたまま豊野の顔を見て、次いで祕の方へ向きなおす。

「へ……」「え……」

とぼけた声を漏らしながらも、次の瞬間には互いに顔を交わすような格好で喜びの抱擁をしていた。

《同刻 高天原艦内 艦長室》

「ああ……そうだ伊弉諾^{いざな}。シナガトベに続きウカミタマもこちらで殲滅した。正直諦めかけていたが、奇跡とはどこから降ってくるのか解らん」

窓の外からはほぼ満月となった月光が入り込んでくる。その不気味な光を背に受けながら、国常は受話器を片手に話し込んでいた。

「これはツケだ。いくら運の巡りが良くとも、こちらが尻拭いを押し付けられている格好には変わりない。早速新たな作戦にはSDC 1に身を寄せて働いてもらうかな」

しばらく一方的な話を続けた後、国常は受話器を下ろしてため息をついた。

「……やはり知っていたのか、お前は」

暗い部屋の真ん中には洋風デザインの椅子が1つあった。国常が自分のデスクから体を動かすと、部屋の中に差し込んできた月光が椅子に座る少女を映し出した。

「いえ。タタリはある時間を境に強化されていく様相は知っていますが、この世界のようにはっきりと名前を持ち、特徴を持って攻撃してくるタイプを私は知りません」

「つまり……草薙の知っている世界とこの世界は、似通っているが進む道は違っていると」

「私もそのように判断しています。元より私には歴史改ざんなどという高度な計画はありません。この時間に移動して来たその時から、私はこの星の住人です。ただ私の故郷を滅ぼしたタタリ達を……」

剣は細い深呼吸をしてから再び芯のある声で言い放つ。

「天照で、討ち滅ぼしたいのです」

国常は自分の顎を擦りながら窓の外へと視線を移した。

「……本当にいいんだな」

高天原はゆつくりと北上する。押し退かせた戦線に戻さないように。そして奪われた日本の国土、青森と北海道を完全に取り戻すために。

第3章その1 コミュニティ障害

第3章

《高天原艦内 11階 カフェ店内

2022年7月4日 午後》

落ち着いたジャズピアノが優雅に流れる店内。テーブルとテーブルの間には観葉植物とほのかに香るアロマキャンドルが置かれている。入口は締め切られており店内には雑音がない。静かに腰かけたままで居れば、誰もが高天原の艦内に居る事を忘れてしまう。

「ふうー……」

運ばれて来たセイロントーとメープルスコーンを楽しみながら1人本を読む女性。彼女を照らす照明は、少しオレンジが掛かった温かみのある色をしていた。まだ温かいスコーンをサクッと齧ると鼻と口に絶妙な甘さが染み渡る。最高に優雅なひと時だ。

「いらつしゃいませ」

入口の扉が開かれて別の客が入ってきた。彼女は一瞬顔を振り向けてみたが、気にすることは無いとすぐに本へ視線を落とした。

「おあつ、く、櫛名田？ 何をしているんだ？」

「えー？ 豊野さんこそ！」

先に声を掛けた……と言うより驚いて声を上げてしまったのは、店に入ってきた豊野の方だった。彼女は正午から深夜に掛けて休むように言われていた。同じく櫛名田もアラート調整のために午後から夜10時までは自由行動となっていた。

「えーと……」

互いに気まずそうな声を漏らす。まさか遭遇するとは思っていなかっただけに、初めのうちはどうすれば良いのか解らなかった。

「せ、せっかくなんでこっちに座ります?」

「……お、おう。他に客もないのに、私が別のテーブルなのも何か気味が悪いからな」

そう言つて豊野はテーブルの椅子に腰かけた。どんな風に相手になればいいか考えを絞っていた彼女だったが、改めて対になった祕を見ると自然と言葉が浮かんできた。

「しかし何で櫛名田がこんなシャレ凝つた店に……」

「それはこっちのセリフですよ……ボクは元々、この店に通つてたんです。お客さんが少ないつて言うつと変ですけど、この時間帯ならほとんど他の客は来ないんです。外装も外装だからお店である事すら知らない人ばかりで。豊野さんはどうしてここに?」

「ああ……私はな、恥ずかしながらこの半年間、ずっと作戦のことしか考えていなくて、高天原の事をほとんど知らなかったのだ。でも今は戦闘航空部隊や技術部が自発的に仕事をしてくれるようになったし、その結果戦績も上がっている。だから私は、それで出来た余裕を使って高天原の事をもう少し知ろうとしたのだ。戦闘指揮官とはいえこの船の長に数えられる身分だからな、一応」

「なるほどー……その流れでこの店に?」

「ま……う、えつと……すまん、本当はこつこの慣れていないんだ……ひとり飯?　ひとりカフェ?　櫛名田の様に日常的に利用するならそれで様は決まつてるのだろつが……うう……すまん、能書きばかりで私を変に思つたろう。素直に笑つてくれ」

豊野は喋れば喋るほど声の芯が細くなつていった。表情を忙しく変えながら耳の上を赤くしている。

「(何この人可愛い……) い、いえ別に!　変なこと考えてるつて訳じゃないですよ!　ただ他の隊員はあんまり豊野さんがこつこの店に近づくところ見ていないから、やっぱり不思議に思つちゃうかもしれないですね……それより、何か頼まれます?」

「ああ……エスプレッソ、飛び切り苦いのを頼む」

「えーと……ここ、紅茶専門店ですけど」

「……………」
テーブルに肘を立てていた彼女は両手で顔を覆い、聞こえるか聞こえないか程の音量で「まかせる」と言ってから静かに溜息を吐いた。

女性店員が運んできたのは祕が頼んだものと同じセイロンティーと小さな林檎のカップケーキだった。2つを目の前にした豊野はその整いの良さに目を見張りつつも、ここからどうすれば良いか解らないと訴える視線を祕に向けた。

「別にティーマナーとか考えなくていいですよ。好きなように食べてみてください」

「そうか……では」

スプーンを右手に取った豊野はケーキを1口食べて小さく唸る。それから紅茶を啜って、今度は心落ち着けたような溜息を吐いた。

「はぁ……すまん、なぜか世話になってしまった」

「ボクの事は気にしなくていいですよ。それに……豊野さんはもつとその性格で押して行った方が人気者になれると思いますし」

「……ああ、今までの振る舞いは、指揮官として素は見せぬ見せぬと努力した結果でもあるんだが……やはり本来の自分はなかなか変えられないものだ」

戦闘指揮官としてのマニュアルに則った態度振舞いが豊野の行動原則だった。努力に愚直な彼女にとっては、書籍のマニュアルほど縋りやすいものはなかった。しかしマニュアルには、豊野が豊野として振る舞う方法については当然書かれていなかった。もちろん普通の人間としてのストレスは気付かずに溜め込んでいた状態だったが、先日の焼肉屋パーティーに参加してからは心境にハッキリと変化が現われた。

「……でも、ボクは羨ましいですよ」

祕は冷めてしまった紅茶を口にしてから、少し寂しげに呟いた。
すっかり面目丸つぶれだと思ひ込んでいた豊野は、そんな素の自分

を羨まれて疑問を抱く。

「な、何を不思議なことと言っているんだお前は……私なんか見ての通り、あまり人と上手くコミュニケーション取れないし、何か参考になるものがないと自分で判断できないし、やることなすことおつちよこちよいで、それを自分でひた隠す事だけはやたら上手いだけなのに……」

少し落ち込んだような声の調子を変えずに祕が返す。

「それって、言い換えれば素の態度で人に好かれるって事ですよ。

あの焼肉パーティー以来、豊野さんのファンというか……その、あなたを狙っている人が増えてるって話を聞きましたし、実際に気になってるって言うてるパイロットもいるんです。……自分で居られるだけで人に好かれるって、それはとてもすごい事なんですよ」

「うーん……私も今年で28になるが、8歳下の新人に諭されるとはな……しかし男女の色恋など、職業柄ずつと考える暇も機会もなかったからな……」

お互いに残った菓子を食べきると、しばらくの無言を挟んでから紅茶を飲み、食器を店員に下げてもらってからようやく次の話に移った。

「そういえば、櫛名田は何でパイロットになろうと思ったんだ？お前の年代だと航空学生になる前から、タタリと戦う事になると判り切ってるはずじゃないか」

その質問を聞いて、祕は瞼を少し大きく開いた。そして視線をしばらく周りに配ってから、強張った口調で語り始めた。

「えっと……豊野さんは、日本における女性戦闘機パイロットが何人いるか知っていますか？」

「む、お前を除いた上で1人は確実に知っているが……櫛名田以外にも居たのか？」

「いいえ。女性戦闘機パイロットは、航空自衛隊史上2人しかいません。それはボクと、ボクの憧れだった人……堀越^{ほりこし}伊那美^{いなみ}さんです」

豊野が頭に浮かべた人物とは、まさに堀越 伊那美の事だった。

「航空自衛隊史上初めての戦闘機パイロットであり、タタリの前線で戦い続けていた彼女はボクの中でヒーローでした。ボクが進路で悩んでいた頃には毎日ニュースで堀越さんの事が放送されていて、自衛隊は防衛を頑張っていると言うアピールがされていました。ボクはそんな彼女を見てパイロットに憧れたんです」

「でもパイロットは思い立って成れるようなものじゃないぞ!？戦時中とはいえ、そんな歴史に名を刻むような功績をなんで隠しているんだ？」

豊野は驚きつつも、何故か落ち込んでいる彼女を励まそうと声を立てた。しかしそれでも祕の調子は変わらない。

「堀越さんは積極的にテレビにも顔出してたからみんな知っているけど、美人で、身長も高く、その上語りが上手くてみんなの人気者でした。……後から気づいたんですけど、ボクはパイロットじゃなくて、堀越さんになりたくて航空学生になったんです」

「だが、その堀越は……」

豊野はあえてその先を口にしなかった。祕も、事を改めて思い出したくはなかった。

2010年代の戦線はよく前半と後半に分けて語られる。15年まではタタリと押したり押されたりとの戦いを繰り返していたが、2016年の北海道事変以降は連戦連敗を重ね、あつという間に北海道は占領されてしまった。その中でも戦果を上げ続けていた女性工員スパイロットの堀越 伊那美はついに2018年、夜間の作戦行動中に海へと墜落した。原因は最後まで解らなかったが、海面に残されたF-15JATの片翼だけが事実を語っていた。

凄腕のエースであり、国民のヒロインであった彼女は、七夕の3日後に死んだ。享年39歳だった。

「ショックでしたが……ボクはより訓練に打ち込むようになり、ついにウィングマークを取得して戦闘機パイロットの養成を受けられるようになったんです」

今までの話をよく飲み込み、部下のために真剣に答えを考える豊野。しかし考えれば考える程同じ疑問に行き着く。

「……ん、待てよ？ とするとお前、めちゃくちゃエリートじゃないか。よく考えなくても20歳で三尉だし、むしろ羨むのは私の方になるはずだが」

その上、現状では最もパイロットとしての能力全般を要求されるF-3心神を操縦しているのも祕だ。若年である事を勘定に入れれば、凄腕の女性パイロットと謳われた堀越よりも有名になるべき成績を、彼女は既に持っているのだ。

祕は視線をまっすぐ豊野に向けた。そして、今まで誰にも言えなかった本懐を口にする。

「それでもボクの目標は堀越さんなんです。強くて、綺麗で、かつよくて、優しくて、誰とでも饒舌に話せて、とんでもない戦績を残して散って行った……そんなあの人が目標なのに、ボクは……」

口元を歪める祕を、豊野は眉を寄せながら黙って見つめていた。

「知っている人として上手く話せないし、身長は3センチも規定に足りてないのにお目こぼしで通してもらったし、作り笑顔なんて出来ないし、テレビの取材は逃げ出す始末だし……ボクなんてそんなものなんです。だから特別話題にもならない。だからと言って演技で撮影されたり他人と話したりなんて……絶対に無理なんです」

憧れと満ち足りた環境、それらと自意識の隔たり。簡単に嘘の付けない彼女の不器用さ加減は、人付き合いに大きく支障をきたす程のものだった。その点、豊野は素の自分で居るだけで人が好意を寄せる。祕にとってそれは憧れそのものであり、同時に超えられない壁を見せつけられたような感覚がした。

「……………」

豊野にとって、人から改まって悩みを聞かされた経験はあまりなかった。特に上手い返しなど思いつくはずもなく、ああ言えばこう言われると自分の頭の中で状況を再現しては壊す。重苦しい沈黙が

カフェの客室に張り詰めていたその時、豊野の手元から電子音が鳴り響いた。

「こ、こんな時に誰が呼び出しを……ああ私だ、どうした？」

豊野は艦内で常時使用されている通信機を手に取り呼び出し人と話している。その様子を祕はぼうつと見つめていた。こんなことを豊野に話して余計な同情をされたら困るが、かと言ってせっかく話したのに無視されるのも怖い。どうしたらいいか、もうどうでもいいかとフワフワした考えが祕の心を薄い膜で覆っていた。

「すまん櫛名田、今から緊急の作戦会議を行うそうので私も行かなければならない」

「き、緊急ってまさか？」

「違う違う、タタリの襲撃じゃないぞ。作戦部にいれば突然の呼び出しなんてよくある事だ。悪いが先に失礼させてもらうぞ」

「あ……はい」

仕方ないと思いつつ豊野は腰を上げた。そこでもう1度、祕に何と云えばいいかを考えてみると、横槍のような呼集のおかげなのか、弾けるように言葉が浮かんできた。豊野は立ったままの姿勢で祕に向かつて言った。

「お前は嘘を付けないコミュ障で、私は正直で居られないコミュ障。私もさつきまでは想像もしていなかったが、案外私たちは似ているのかもしれない。悩みこそ違つかもしれんが……どうだろう、何か話がある時はここに2人で来よう。それで解決できない前提で吐き出してみるんだ。私はそうしてみたいんだが……櫛名田はどうだ？」

突然の申し出に祕は口をあぐりと開いて豊野を見上げていた。

「ど、どうなんだと聞いている」

「——はっ、すみません。あまりにびつくりして……」

「……やっぱり私の柄じゃ……」

「ああそう言う事じゃないです！ ボクも話し相手が欲しいです！ ほら今日読んだ本だってカバーと中身が違うんですよ。読まないくせに手持無沙汰だからって適当な本で格好見繕ってたんですよ

あはは。その……ボクは……豊野さんが良くて、時間さえ合えば、いつでもよろしくお願いしたいです……」

「……そうか、分かった。じゃあ何時とは決めないが、またよろしく頼むぞ」

そう言つて豊野は急ぎ足に店を出ようとする。その様子に少し惜しむような思いがした祕は、ついついどうでもいい事で足を止めさせてしまう。

「豊野さん！ コミュ障って聞き慣れない単語ですけど、コミュニケーションが下手って意味で合ってますか？」

「あ、そ……そうだ！ 別に深い意味は無い！ ではまたな！」

第3勝その2 炎の雪

《航空空母《高天原》 司令室内 作戦の最終説明の為、関係者らが集合

2022年7月7日 午前10時》

「それではこれより、作戦名《太陽の涙》の最終確認を兼ねた説明を行う」

本で行われる侵攻作戦に参加するほとんどの人員が一齐に指令室へ集められた。指令室内はそれほど広くないため、整備員達と同じにオペレーター達も立ち姿勢で豊野の話を聞いていた。

「豊さん、俺達は初めて聞く作戦なんだけど」

指令室の中央、もつとも豊野と対面で話せる場所には、今となつてはあらゆる作戦の中心となっている醇一と剣が立っていた。彼が少し不満げな声で訊ねると、豊野もまたすっきりしない調子で返す。「作戦を決める推移を逐一教えたつてしょうがないだろ。今回ののは最後までアメリカ軍から調達する兵器についての話がまとまらなかったから……その辺に突っ込むのは勘弁してくれ」

「べ、別にそうまで言わなくても良いけどさ……んで、今度は何やるんだ？いつもの侵攻作戦じゃないの？」

「順繰りに話すから黙って聞いててくれ須佐美。……こほん、ではまずメインモニターの方を見てくれ」

指令室のメインモニターには北海道と東北の航空写真が表示された。そこに黄や赤の線が何本も引かれ、豊野がハンドモーションを使って画面を操作する。

「我々の戦線は既に青森の南県境を突破し、確実に北上している。制空権に関しては既に津軽半島全域を奪った。これで青森の奪還については順調に行くと思われたのだが、ここに居たつて大きな障害

にぶつかつた。地図の八甲田山周辺を見てくれ」

画像がズームされた瞬間、指令室内に驚きの声がわいた。示された八甲田山の周辺が真っ赤に表示されているのだ。

「この赤い点は全てタタリの軍勢だ。以前までは単なる拠点と言う分析結果が出ていたが、改めて調査した結果……ここにカテゴリーエラーが存在する事が判明した」

ざわついていた指令室が一転静まりかえる。

「ほ、本当ですか豊野さん……？」

醇一の隣に立っていた祕が神秘的な面持ちで訊ねる。

「ああ、6月の2日と10日に現われたものに続き3番目のカテゴリーエラーだ」

カテゴリーエラー——それは名称そのものが“従来の航空自衛隊の戦力では敵わない”という意味を指している。そんな敵が三度現われたと言うものなら、動揺しない人間などいなかった。

「このカテゴリーエラーは艦長命令で《ヤマツミ》と命名された。以降はこの名称を使用する。ヤマツミの大きな特徴は以前の2つと違い拠点型であるという事だ。山そのものに寄生して一步も動くことは無い。その代りにタタリにとってのエネルギーを大量に生産する能力がある。言わばヤマツミはタタリ軍の母体であり、^{へいたん}兵站であるという事だ」

兵站とは軍隊の補給や整備、連絡を行う機関や役割そのものを言う。軍隊は人間、タタリを問わず兵站なしに作戦行動を起こせない。「つまりヤマツミさえ押さえれば青森全土は我々のもの、逆に言えば奴を倒さなければ青森を奪還する事は出来ない！」

力強い豊野の声に室内の空気が一段と引き締まる。その中で1人、落ち着いた口調の男が手を挙げながら口を開いた。

「で、どうすんのさ豊野。全軍突撃とかいうのは止めてくれよ」

「これだけ人員を集めておきながら、そんな作戦でもない作戦を伝えるとでも思つたのですか大戸二佐。ちゃんと対策はあります」

航空戦闘部隊の長である大戸は、人が詰めかけている指令室のな

かで唯一椅子に腰を掛けていた。左手をポケットに納め、足を組んでいる格好からはともリーダーと窺えない締まりの無さだが、それが逆に大戸の余裕ある風格を漂わせていた。

豊野は再びハンドモーションでメインモニターの映像を切り替える。

「これはアメリカ軍の最新兵器。ハイパーテルミットスパーク、通称HTSと呼ばれる空対崇特^{くうたいすい}殊焼夷弾だ。これを空中から投下すると、半径2キロの範囲を9000度の熱で焼き尽くす。実際運用で全てのタタリに効果がある事は証明されているが、1発2000億円する爆弾だ。今回はこれを2発だけ納入してあるので、1撃でもヤマツミに喰らわせられるように作戦を組んである。これよりは各部署、部隊単位での作戦説明に移るため、それぞれの上官の元に移動し指示を仰げ。全体説明は以上だ」

《2時間後 第1ハンガー》

「で、HTSを使うのはやっぱり俺の機と」

「――ぼ、ボクがですか？」

第1ハンガーには醇一、剣、祕、そして豊野と技術開発部長の堀越。夜見が作戦準備のために入っていた。醇一と祕は整備されたF-0天照とF-3心神の隣で今日の作戦についての役割を伝えられていた。

「別にボクの心神にHTSを積まなくても……天照のペイロードなら2発とも持てるんじゃない？」

祕は困ったような様子で豊野と夜見に向かって言う。通常のミサイルであっても安くは無いが、いつも当たり前のように使ってるため、兵装として持つ事には疑問を抱かない。しかし2000億円の爆弾、しかも2つしかない内の1つとあっては話が変わる。祕は天照にHTSを搭載するのは当然と思っていたが、従来戦力である自分には荷が重いと訴えた。

「うーん、それは出来ないんだよね祕さん」

白衣を着た夜見が、不安を口にする祕へと答える。

「作戦空域は制空権が奪えているとはいえ、タタリの兵站を叩くわけだから大空戦になる事は必至です。だから被弾による暴発、超機動による取りはずれを防ぐためには、HTSを兵器庫に格納しないとダメなんだけど……天照のキャパでは2つ積むことは出来ないし、それ以前に爆弾の形式を既に天照と心神用に適合させているの」

「じ、じゃあ往復で爆弾を運べば……」

祕が慌てて別の提案をするが、腕を組んで話を聞いていた豊野に速攻弾かれる。

「馬鹿者。今回の作戦は空戦力を一斉に投入する事で、確実にHTSをやマツミに当てるのを目的としているんだ。往復させるような暇はない」

「……う、はい」

彼女は肩をすばめて小さく返事をした。祕がいつもの調子ではないと疑問を抱く3人は、顔を合わせて小首をかしげる。醇一はそんな彼女の肩を叩いてから問いかける。

「どうしたんだお前らしくもない」

「ボクラしさを解ってるような口聞くなバカ」

「はいはい、でも今は作戦間近なんだぞ。問題を隠しているとみんなに迷惑をかける事になるから……いや、迷惑を掛けられるんだつたらまだ救いようがあるな。八甲田山は既にタタリの巢、あそこに襲撃を掛けるとなると蜂の巣をつつくようなもんだ。誰も口にはしないけど、誰かは確実に墜とされる……そういう戦場を目の前にしてるんだぞ」

いつもは祕をからかって調子に乗せる醇一であったが、彼はずっと気楽に構えながら誰よりも状況を深刻に見ていた。その為に、僚機である祕には特段の心配をかけていた。

「おい。何か言えよ祕」

醇一は肩に触れた手で彼女の体を揺すった。

「……………」

それでも返事しない彼女に、今まで口を噤んだまま立っていた剣が一步だけ寄った。

「どうしたいのですか」

幼い声色には一切の感情が無いと思わせるほど冷たく響いた。それから俯いていた祕の視線と、身長的に見上げる格好となる剣の視線が一致した瞬間

「……解ったよ！ どうせボクが元より積む予定だったんだろ！！」

祕はハンガー内にハッキリと反響する程の声を上げながら醇一の手を振り払った。そしてすぐに醇一から2、3歩離れると少し呼吸を荒くしながらも、一転声のトーンを落として再び言った。

「解りましたよ……行きますよ、HTSでも何でも積んで……八甲田山へ」

豊野はあえて表情を変えなかった。恐怖やプレッシャーで、本当に祕の精神がおかしくなっているなら、豊野は作戦の責任者として別の心神パイロットに役割を委任させる必要がある。それでも彼女は祕に作戦を任せた。確証は無かったが、彼女の目は死んでいるように見えなかったのだ。

「……櫛名田」

まだ呼吸の落ち着かない祕に豊野が声を掛ける。

「後で話を聞こう。作戦が終わってからな」

祕は小さく頷きはしたが、声で返事はしなかった。

「（櫛名田は作戦自体を恐れている訳ではない……理由は他にあるはずだ。何かもっと混濁複雑な、あるいは単純実直な……）」

《青森県八甲田山空域 《太陽の涙》 作戦発動

2022年7月7日 午後1時22分》

「全機情報を確認、これより先鋒は戦闘空域へと突入する」

東北の隅まで追いやられたタタリ軍が集まる八甲田山。その戦闘空域に、陸上から発進した機と高天原から離艦した機、合計80以上の戦闘機が臨戦状態で北上する。この大所帯においても部隊長を務める大戸は、全ての情報を冷静に頭で処理しつつ、会話を持ちかけるようにして指令室の豊野へ声を送った。

「豊野、何か言っておくことは無いか？ ハンドル回しっぱなしになるとみんな興奮して耳が遠くなるからな」

『そうだな。全機、無理をするな、覚悟は決めろ、だ。今から入る空域ではいちいち倫理を問うな。厳しいようだが、我々はそれほどの状況に至っている。その上で再び命令する……ちゃんと生き残れ、そして勝て』

何十機もの戦闘機は編隊を組んで飛行しているが、パイロット自身はそれぞれ空の孤独を纏っている。フライトスーツを着て、コックピットに乗り、ヘルメットを被れば、1つの世界と自身が切断される。視界に入るのは360度に広がる青空。ただまっすぐ飛んでいるだけなら、まるで青の空間に浮いているような感覚に陥るのだ。それぞれのヘッドセットに豊野の声が届く。まるで突き放すような物言いではあったが、死地に向かう覚悟がある者にとっては逆に気持ちの良い命令でもあった。恐れが無いわけではない。誰もが死の恐怖にろっ骨が締め付けられる感覚を覚えている。逆にその緊張感が、細い繋がりを維持する通信に耳を傾けさせた。

「スクエア1、もうケツに火ついてんぞ」

「黙れビレッジ2。お前こそケツ突かれて火吹くまで助けてやらねーからな」

『コラいつまで私語を続けている。空域は目の前だぞ』

タタリのレーダー分布はずっと変動無かったが、先鋒隊が十和田湖の上空を通過した前後に大きな反応を返した。指令室の3Dモニターには飛行能力を持つタタリが一斉に飛翔を始めた様子が克明に映し出されていた。

『敵勢が動いた！ 各自空路の確保を考慮しつつ全力で敵を叩け！』

豊野の張り上げた声に全員が口元を引き締める。その後押しをするかのように、大戸は大口を開いて全機に呼びかけた。

「お前らア！ この手数なら、確実にエースパイロットの称号を賜れるぜ！！ 帰れたらの話だなッ！！」

一斉に機械の咆哮が唸りを上げた。弾丸の雨は、かつて四季の色を鮮明に表してきた八甲田の地に向かって飛ぶ。それらは身を挺して防衛に出たタタリの軍勢を貫き、山々に響く破碎音は息つく間もない空戦の開幕を知らせた。

「体調は良好ですか」

F・O天照のコックピット内、剣は両手を膝の上に置きながら醇一に訊ねた。

「ああ……悪くは無い」

ようやく席の配置に慣れてきた醇一だったが、やはり剣の匂いが直に伝わってくると調子が狂う。間違っても11歳の彼女にどぎまぎしている訳ではない。しかし内股に少女を挟んで未来技術の戦闘機を動かすなど、普通の戦闘機パイロットとして生きていたなら想像がつくはずない現実だ。今まで何年もかけて航空技術を得てきた醇一にとっては、肉体的にも精神的にも慣れきる事の出来ない状態だった。

「それで……今日はどうやって捌くんた、剣」

「確実な回答は、ヤマツミの動きを見ないと断定できません。高度から様子を見つつ、間合いを狙って急降下爆撃を行うのが適切と分析します」

「急降下って……軌道計算が出来れば後は投下するだけでいいだろ。もしかして計算できないとか言っくなよな？」

「計算は可能ですが、HTSは設定された高度で起爆しないとヤマ

ツミに有効なダメージを与えられません。再度詳しく示すなら、ストーム2が急降下爆撃を行い、私達が至近航空火力支援を行うのが適切です」

その声を通しっぱなしの通信回路で聞いていた祕はぼやくように言った。

「……それ、信用していいの」

「効率的な行動を演算した結果です」

「本当に計算してるわけ？」

「約6000恒河沙じようがしゃのシミュレーションから最良を選んだ結果です」
剣が平坦な口調で間髪なく返すと、傍で聞いていた醇一が割り入ってくる。

「おいお前ら……何で言い合いみたいになってるんだよ」

「醇一だって草薙のこと疑ってただろ！？」

「そ、それは単純に疑問を投げかけたただけだ！ お前のは明らかに食って掛かってるだろ」

「食って掛かって上等だ。ボクがHTSをヤマツミにぶち込めばいいんだろ？ せいぜいロボっ子と一緒にボクを支援してくれればいいよ」

「まったく……なんでイラついてるか知らんが作戦中は落ち着いてくれ」

醇一の後方に付いていた祕は速度を上げて高高度を移動する。そしてヤマツミの本体が窺える位置まで来てから、彼女は心神のガンカメラで拡大撮影を行った。そして映ったものを見て、息を漏らしながら声を震わせた。

「……これが、3番目のカテゴリーエラー……」

その動画は即時、人声が飛び交う指令室にも送られた。メインモニターの間には祕からの映像が表示されている。絶え間なく状況を判断し指示を送っていた豊野は、意識を保ちつつ動画の方へと視線をずらした。

『これが……戦闘時のヤマツミ』

今までヤマツミと呼んでいたタタリは、山の斜面に大きな口を開けている奇妙な形態をしていた。一目で見ただけなら地面の裂け目でしかなく、人類の敵とは想像しにくい。しかし裂け目からは高濃度の瘴気が発生しており、周囲には負傷したタタリが集まって体を修復していた。事前の分析通り、ヤマツミはタタリの母体であり、兵站である事は間違いなかった。

山の斜面に出来た大地の裂け目、黒の穴。そこから飛び立った小型飛行タタリは、周囲の空域で戦闘行動を起こす航空自衛隊の機へ勇猛に飛び掛かって行った。大戸はなるべく全体の統率に注意していたが、戦闘開始から5分後、既に4機の味方が撃墜されていた。「数を見て慌てるな！ 奴らは必ずパターンを持っている、それを逆算してひとまとめに叩けばいいんだよ！！」

しかし大戸の様に肝の据わったパイロットばかりが居る訳ではなかった。旋回を繰り返し、機銃を撃ちこみ、地上へ通常焼夷弾を落としてからモニターを覗くと、また2機分の反応が消滅している。「ちい……お前らア！ タタ公の1機や2機壊した所で調子に乗ってるとすぐ墜ちるぞ！」

彼の余裕も底抜けではない。自分の武装が減るたびに、味方の戦闘機が減るたびに、確実に心がすり減るのを実感している。仲間への怒声にも似た励ましは、もはや自分に向けたものとなりかけていた。

『（リバー1撃墜……ブルドック2大破……これでは戦闘が続けられないぞ……！）』

戦況をドットで表示するボードを眺めながら、豊野は歯を食いしばっていた。ほんの数秒の間に何機も被弾し、確実に落とされていく。緊急脱出すれば安全ではない。タタリはパラシュートで無防備に浮かぶパイロットの目を見て喰いに掛かる。それならいつその事と、戦闘機と一緒に爆死する人も少なくなかった。

「にやろっ……クソツタレエー！！」

大戸の目の前でまた1機の戦闘機が墜ちた。彼の機関砲弾薬は残

り2桁、既に撃墜された戦闘機は12、空に舞い続ける機の戦闘力も限界に近づいていた。しかし戦況には損失ばかりが目立っていたが、それでもヤマツミへの道は確実に開いていた。

「——行っけえええッ！！！」

誰もが願っていたこの作戦の本命。天から射られる劫火の矢を。遙か高高度から飛来する心神、それを守るように飛ぶ天照。

祕は垂直姿勢のままヤマツミへの空爆域に入ってきた。すぐにヤマツミを防衛するタタリが彼女の心神を狙ってきたが、その群れは天照の40ミリ機関砲によって無残に砕け散る。

「祕！ 速度に気を付けないと離脱する時にブラックアウトするぞ！」

「そんな事分かってるっての！ いいから黙って支援しろ！！」

気丈に声を張ってはいるが、祕の体には体重の8倍もの重力負荷が掛かっている。急降下姿勢から離脱するときには機首を上げる為、更に重力は掛かる。

「HTSの適切投下位置に到達……」

「今だ！ 投下しろ祕ッ！！」

剣の指示を受けて醇一が声を張り、あまりの負荷にもう喋れなくなった祕は手さぐりで兵装管理のスイッチを押し、何とか兵器庫からHTSを投下した。

宙に舞った爆弾は慣性を受けてヤマツミに向かって一直線に落ちる。

——ついに泥沼の戦闘に幕が下ろされる。そんな風に誰もが思っていた。

「コオオオオ……」

突然ヤマツミが——大地そのものが唸り始めた。激しい咆哮ではないが、大気が明らかに震えるような太い轟音、それが響いた瞬間、底なしのようにも見えるヤマツミの口からあの光線が飛び出してき

た。

「祕ッ!!」

「——ッッ!」

祕はヤマツミのビーム攻撃を目にした瞬間に慌ててしまい、ブラックアウトを度外視するような高機動で機首を上げてしまった。

「醇一、HTSが……!」

剣が珍しく声を強張らせて言う。醇一は夢中で爆弾のありかを探してみるが

「そんな……割れてるだと……!?!」

とつくに爆発しているはずのHTSは、弾そのものが真つ二つになった状態で宙に舞っていた。2つに割れて爆発するわけでもなく、ただ地上に向かって落ちているのだ。

『どうした櫛名田! おい返事しろ!!』

豊野は音割れする程の声を張り上げて祕に呼びかける。彼女の心神は何とか地面激突を回避出来る方向に飛んでいたが、それ以外の挙動はほとんど無い。

「くそッ……あいつ多分ブラックアウトしちまってる。おい祕!

早く返事しろ!!」

ブラックアウト……それは重力による加圧で脳に血が行き渡らなくなり、意識が飛んでしまう現象を指す。自力で回復できない訳ではないが、一度ブラックアウトに陥ってはまともな戦闘行動に戻れない。醇一はとっさに祕を追いかけようとした。

「ダメ」

「じ、邪魔すんな剣! あいつあのままじゃ——」

醇一の心配はその言葉を告げる前に起きてしまった。大地の裂け目、ヤマツミの口からまたビームが放射され、一直線に飛ぶ心神の尾翼を撃ち抜いた。

「カテゴリーエラー」と名称されるタタリは、あのような光線を放つという特徴があります。効果は破壊に限らず、爆発能力の無効化、電子バリアの破壊、目標のエネルギー充填と多岐にわたります。ス

トーム2のHTSは間違いなく爆発能力の無効化に――」

「今はそんな事長たらしく説明しなくていい！　ひつ、祕が……！」

醇一は剣の耳元で怒鳴ったが、それでも彼女はまた冷静な口調で豊野に通信を送る。

「ストーム2を航空管制で高原に、無理であれば岩手に戻してあげてください。あの損傷なら機械管制で十分戻れるはずです」

『それはもうやっている！　それより須佐美、早く2発目を投下しないとチャンスが無くなる上に大戸たちが全滅するぞ……！』

醇一は歯茎から血が滲むほどに奥歯を噛み締めていた。力の及ばない自分の判断に腹が立ち、行き詰った状況に脳が焼け焦げそうだった。

「醇一」

「……っは……はぁ……」

それでも剣は静かだった。残酷なほどに、声の波を立てず。

「2発目を打ち込みます。ストーム2の行動を無駄にしないでください」

「……これから……どうすれば……」

天照は姿勢を反転させ上昇を続けていた。急降下爆撃の姿勢には移行できる状態だったが、同じようにHTSを投下したらヤマツミの思う壺だ。天照の爆弾を失えば対抗手段はなくなり、航空自衛隊は巨大な損失を負ったまま青森撤退を余儀なくされる。

剣は上半身をひねって醇一の方へと振り向いた。そして汗の滲む顔をしっかりと見あげながら、幼い口元をしっかりと動かして言葉を伝える。

「天照の光火砲には、タタリが持つビーム能力に対して中和作用があります。それを利用して空爆域に侵入し、ビームを中和しながらHTSが爆発するまで護衛するのです」

「……だがそれだと、俺達が9000度の熱で燃やされるぞ……。仮に大丈夫だとしてもHTSが発火するまで護衛をしていたら、地上に激突する速度で落下する事になる」

「それも大丈夫です。天照には翼下エンジンよっかを使った超機動が可能です。説明はもうしません。とにかく時間がありません。こちらの操作で急降下姿勢に入りました。私は機体制御と激突回避のために処理を行うので、HTS護衛などは全て醇一に任せます」

「お、おい待て剣！　って…… ああもう、出来るならやってやるよ……！」

半ば自棄になりながらも、醇一は天照の両ハンドルを握って大地を見据えた。機は先程の祕と同じく垂直姿勢となり、一瞬で高度を縮めていく。

「天照のコックピットでは空間湾曲の中和作用があるのであまりGを感じないはずですが、超機動を取った際にはさすがに大きな負荷がかかります。注意してください」

「だからその超機動って何——」

「はいHTSを投下しますよ。ヤマツミのビームに注意してください。醇一はビームの方向を意識してトリガーを引くだけで構いません」

「話を…… もういい、今は目の前のクソツタレが先だ」

いい加減諦めた彼は、座り姿勢のまま体を屈ませる。同時に剣も肢体を丸くしながら精神を集中させていた。

「……来た、上！」

トリガーを引いた瞬間、天照の機首にある光火砲が青色の火を噴いた。火は一筋のビームとなりヤマツミのビームと接触し、その度に対消滅する。ヤマツミはまるで慌てているかのように何発も乱暴にビームを放つ。ほとんどは天照を掠めて空に消えていったが、命中しそうなものは確実に光火砲で中和を行う。

「起爆三秒前……」

醇一達は爆弾のすぐ後ろについて地面に直進していた。ヤマツミも必死であつたためにHTSが爆発するまで安心出来ない。爆弾を無効化されて負けるか、ヤマツミと一緒に燃えるか、それとも生き残るか。最後の局面に近づく度に結果は絞られていった。

「燃えるオオオ——ッ！！！」

醇一がそう叫んだ直後、HTSは真つ二つに割れた。そして強烈な光を放ちながら、まるで火花を散らすように広範囲へ光燐を降らす。地表へと振り注ぐ熱はまさに太陽の涙だった。地球上の、日本の、八甲田山周辺だけが、瞬間的に太陽の表面よりも熱くなる。

いくら天照が未来技術の結晶とはいえ、9000度の熱に耐えることは出来ない。それを誰よりも解っていた剣は、HTSが爆発する寸前に醇一から操縦を奪った。

「——うつつ！！」

彼女が腹を擦った様な悲痛の声を漏らす。とつさに醇一が反応しようとしたその時、天照の左翼下エンジンが火を噴いた。

「（なっ………どういう事だ……？）」

あまりに一瞬の出来事であるために、醇一はただ傍観する事しかできない。

左翼下エンジンは爆炎を噴いて機体に右回転の力を与えた。そして天照が当たり前のようにバランスを崩すと、今度は右翼下のエンジンが推進方向とは逆に爆炎を噴かした。そして機体に強烈な右回転力が加えられ、天照は裏返しになりながらもまるでフリスビーの様に回転しながら空を舞う。結果、地面に直進していた天照は重力を感じさせないような軌道を描きつつHTSの焼却領域から急速に離れていった。

轟々と音を立てながらあらゆるものが燃える。夏の八甲田山が、まるで真冬に戻ったかのように白く染まる。そこに在るもの全てを飲み込む劫火。終わらぬ発光現象の渦中で、ヤマツミは最後の唸りを上げていた。

《高天原艦内 11階 カフェ店内 《太陽の涙》 作戦終了から
3日後

2022年7月10日 午前》

テーブルに置かれたセイロンティーはすっかり冷めていた。祕はそれを最初にすすった後、そのまま置きっぱなしにして俯いていた。

「……………」

彼女はカフェが開店してからずっと居座っていた。時計は既に午後0時を回っていた。

特に誰かと会う約束がある訳でもない。豊野は“太陽の涙作戦”における諸々の後処理をする為地上に降りている。彼女はいつもの通り、独りで空いた時間を過ごしていた。

「いらっしやいませ」

カフェの扉が開かれ、新しい客が入ってくる。祕は一瞬、豊野が帰って来たのかと思ったが、その期待はすぐに消え去った。すぐ鼻についた煙草の匂い——嫌煙家である豊野が煙草の匂いを纏っているはずがない。彼女は客人の顔も見ないまま再びテーブルへと視線を落とした。

「…………ふう」

壮年の風合いが漂う男性の声がした。彼はコツコツと店内を歩き、祕から2つ離れたテーブルへと腰かけた。テーブルを挟んでいる分の距離はあったが、彼は祕と向かい合うような格好になっていた。

「……………？」

冷え切った紅茶を飲むつもりで祕が顔を上げる。カップを手に取り、顎をわずかに上げて紅茶を流し込んだその時、向かいの奥に座っていた男性の顔がはつきりと見えた。

「……………っ！」

彼女は驚いた。あまりの驚きにカップを落とすのではなく、ゆっくり、ゆっくりとソーサーの上に戻し、目を見開いたまま音を立てずに椅子から腰を上げた。

「あ…………あの…………」

「ん、私に何か」

恐れながら声を掛ける彼女に、男性は紳士的な態度で答えた。彼

はひげを蓄えた顔を上げて祕をまつすぐ見る。

「い……伊弉諾いさな技師じゃないですか……！」

「……ほう、私の顔を見てそう思いますか。やれやれ現場でも油断できませんね」

「やっぱり！ はっ……そうだ、初めまして櫛名田と言います。えっと……どうして技師が高天原に……？」

「君は私の事を知っているようだが改めて……伊弉諾いさな二郎じろうだ。質問についてだが、私はちよくちよくこの船に用があるために乗せてもらっている。このカフェに来たのも今日が初めてではない」

祕が恐れながら声を掛けた彼はただの男ではない。三菱重工業に勤め、技術開発主任としてF-3心神を完成させた技師だ。彼の功績がなければ、今までタタリに対抗し続ける事は出来なかったと言っても過言ではない。それゆえ、ずっと心神で戦ってきた祕が、彼の事を知らないはずがなかった。

「せ、席を一緒にしてよろしいですか？」

「ああ、構わないよ」

祕は改まった敬語を慣れない口調で伝えつつ、カップとソーサーを持って伊弉諾の座るテーブルへと移った。

「突然すみません色々……」

「私は別に構わないよ。ところでその制服は航空要員のものだけど、もしかして君が、現存する唯一の女性戦闘機パイロットなのかね？」

「ええそうです！ ボ——私の事、ご存じであつたなんて光栄です！」

体を乗り出して喜びを示す祕に、伊弉諾は少し引き気味になりながらも問いかけを重ねる。

「私の元には全体の戦局よりも細かい情報の方が入って来ますからね……それより、私の顔を見て飛び掛かってくるという事は、何か企んでいるではありませんか？」

「う……！」

祕はすっかり見透かされていた。彼女にとって、偶然であっても

伊弉諾と話が出来るのは千載一遇のチャンスだったのだ。伊弉諾は手を顎に添えながら若干したり顔で言う。

「君を悪く言っている訳ではないんだ、そこは勘違いしないで欲しい。昔から私に急なアポイントを取る人は、決まって無茶な願いをしてくる人ばかりでね。それが今回も当たってしまったようなのだが……君は何を言うつもりだったんだい？」

そう言われて祕は勢いを失う。しかしそれで“話そうとしていた事”を取り下げるつもりは無かった。背中を椅子に付け直し、目立たないように深呼吸をしてから、もう一度心意気を立て直して口を開く。

「えと……その、私に……天照を、造つてくれませんか!？」

その突飛な申し出に、今まで大人の余裕を醸していた伊弉諾も眉を引きつかせて驚きを表した。

「お……ああ、いや、なんだ……君は凄いところから突っ込むのだな」

「冗談ではないんです！ 本気で言ってるんです!!」

祕の求めは言葉通りのものだ。F-3心神を完成させた男なら、きつとF-0天照も複製する事が出来る、そう踏んだのだ。

「……頼みが頼みだからな、先にこちらから質問させてくれ。何故あの未来技術の塊をもう1つ作って欲しいのだ」

少しの間考えを巡らせる祕。その間に伊弉諾はテーブルに肘をついて両手を組み返答を待っていた。

「私は、伊弉諾技師の作った心神に不満がある訳じゃないんです。でも……それでも、醇一と草薙が乗る天照には追いつけないんです。初めて天照が作戦に加わった日から薄々感じていたのですが……心神に乗ったままの私では、醇一達の足手まといにしかないんです。3日前の作戦だってそう、2000億円の爆弾を無駄にした私は、操縦に慌ててブラックアウトした拳句、心神の尾翼を破損させてしまつて……」

真剣な表情で話を聞いていた伊弉諾は、彼女の語りに息をつかせ

るために言葉を挟んだ。

「天照の僚機、という特別な位置にいるパイロットとして、コンプレックスが出来てしまったんだ。それで劣っているだけならともかく、作戦行動に支障が来されては、嫌になる気持ちも分らない事はない」

高天原に着任してから、醇一の僚機になってから、ずっと同じ心神で飛んでいた関係だっただけに、祕の天照コンプレックスは他の隊員には見られない形で膨らんでいた。

醇一との技量の差を祕は理解していた。今までその差を、その背中を追いかけていられたのは、同じ戦闘機で飛んでいたから、いつか自分の努力で追いつけるから、という理由付けが出来たからだ。だがF-0天照とF-3心神の間には絶対に超えられない壁があった。そうなってしまうと、祕は自身の事を、ただの作戦行動原理に則ったオマケとしか思えなくなってしまうたのだ。

「わ、解ってくれるんですね！ それじゃあ私にも天照を——」

「だが君の申し出は実現する事が出来ない。これだけは最初にハッキリ言わせてもらう」

伊弉諾の切り捨てるような宣言を受け、祕は体の力が抜けてしまった。とんでもない申し出だという事は祕自身も理解している。それでも断られれば、肩の力が抜けて自然と背中が丸くなってしまう。「まず天照を複製できる程の技術があれば、日本はとくにタタリを領土から追い出しているはずだ。これについては技術屋のプライドを賭けて、嘘でないことを誓おう」

「……はあ」

目に見えて縮こまっている彼女を見て、伊弉諾は若干焦る。祕はまるで、おねだりを完全に断られたような子供の目をしていた。彼女はそれ程にまで自分を追い詰めていたと、伊弉諾は察しながら言葉を続けた。

「それとは別に……君は黄泉戸^{よもつへぐい}喫という言葉を知っているかね？」

「よも……っ……？」

「直接的には“黄泉の世界の食べ物をお口にすると、現世に二度と帰って来れない”という日本神話の中での言葉だが、これは現実世界にも言えることだ。今まで触れられなかったモノに触れれば、必ず触れたモノと共に生きていかなければならない。人類文明が一度核技術に手を出したのなら、核技術のメリットとデメリットと共にずっと生きて行かなければならない事と同じだ」

「それは……つまり？」

「……開発の現場から一線を退いた一般人の私としては、滅んだはずの未来技術には触れて欲しくないと言うのが本心だ。天照をこれ以上運用したり、未来技術を手に入れたりすれば——滅亡よりももっと悪い未来が待っているかもしれない。もっとも、私がその未来像を予測出来る訳ではないですがね」

祕は俯きながらも伊弉諾の言葉を真摯に受け取っていた。

結局、ふわふわと浮かんでいた彼女の願望は伊弉諾によって完全に打ち碎かれた。しかし損ばかりではない。妄想が消えた分、頭の中に余裕が出来た。絶対に追いつけない心神と天照の差に固執する必要はない。そうしたってしょうがないのだから、無理やりにも割り切るしかない。

自分には何が出来なのか。それをもう一度探すために、彼女は携帯のアドレス帳開いた。

第4章その1 二つの変化

《高天原艦内 戦闘指令室 実験監視中

2022年7月30日 午後9時30分》

「むー……」

薄暗い指令室の中、豊野は片肘を机に立てながらぼうつとモニターを眺めていた。

「20式地対崇^{ちたいすい}6連ミサイル効果なし、続くドローンによる爆弾攻撃はレーザー攻撃により失敗」

男性のオペレーターはモニターに投影される情報を淡々と読み上げる。声の調子は平たく、緊張感はない。他にも3人の女性オペレーターがモニターを見つめていたが、豊野を含めて全員の監視者が無気力そうな表情をしていた。

「うー……」

豊野がコツコツとボールペンで机を叩き始める。そのテンポは自然と、次のミサイル着弾カウントを刻んでいた。そして間もなく、高天原から射出されたミサイルが着弾した。

「空対崇^{くうたいすい}巡航ミサイル群の着弾を確認、目標“ハヤアキツヒ”に効果なし」

メインモニターから赤色の棒が消える。誰も「またか」とは言わない。解り切った結果であるのだ。

「あーもう止めだ止め。血税の無駄だ」

まるでさじを投げる様に豊野がボールペンを手放す。今まで淡々と実験結果を読み上げていた男性オペレーターは大きなため息をつき、1人の女性オペレーターは少し心配げに豊野へ問いかける。

「大丈夫ですか三佐？ これ以上データを集めなくても……」

「大きな変化が断続的に見られない以上無理に刺激する事もない。陸自だって準備のために8月半ばまでは北上しないって言ってるか

らな」

「しかし……あの力テゴリーエラーに対抗する策は……」

メインモニターが津軽海峡に浮かぶ4番目の力テゴリーエラー——一線を画した強さを持つタタリの姿を映していた。リアルタイム映像なので辺りの海上は暗く映っているが、タタリの体は鈍い金色の光を放っていた。体長20キロ、横幅は378キロ。北海道最西端の大島から襟裳岬の東沖まで壁の様になって広がる、規格外も度を越しすぎている超巨大タタリ。それが今、北海道と本州を完全に断絶しているのだ。

「……その為に、この作戦会議にこいつを呼んでいるんだ」

豊野は後ろへ振り返り、椅子に体操座りで乗っかる少女に声を掛けた。

「何か策はないか草薙。さっきから一言も話していないが」

北海道を取り返し、日本からタタリを追い出すには、まず本州と北海道を物理的に隔てる壁——その名を“ハヤアキツヒ”とされたタタリを倒さなければならぬ。今はその問題をどう解決するか模索する実験していたのだ。

「V 226部分の、地対空ミサイルがコア部分に激突した映像をもう一度見せてください」

剣は膝を抱えたまま、いつものような感情のこもっていない声で指示する。特別階級とはいえ、三尉である彼女に男性オペレーターは硬い口調で返事をした。

「了解、今からメインモニターで再生を行います」

映し出されたのは10分ほど前に録画された映像だ。画面の中央には、空撮されたハヤアキツヒのコア部分が鮮明に捉えられている。何百キロにもわたり広がる壁は半透明で、鈍い金色の光を放っているのに対し、壁の中央に張付いているコア部分はより際立って光っている。骨の様な白のボディで複雑に形成されたコアはハヤアキツヒの弱点、ないしは本体と見られているが、未だにミサイルを喰らっても反応の一つも返さない。

「着弾の瞬間で止めてください」

再び剣が指示し、オペレーターがそれに従う。静止されたメインモニターの映像をじっと見つめた彼女は、たつぷりと時間を置いてから静かに語りだした。

「まず前提として……従来のカテゴリーエラーと同じく、ハヤアキツヒには通常兵器では歯が立ちません。天照の40ミリ機関砲を全弾撃ち尽くしたとしても壁の防御力と回復力には追いつけない上、最大出力で光火砲をコアに撃ち込んだとしても破壊面積が小さすぎて致命傷には至りません」

「な……じゃあどうすれば良いんだ草薙！」

真っ向から方策を完全に否定された豊野は、緩んでいた表情を一転引き締めて草薙に問い詰める。しかし彼女は小首を傾げたまま語り続けた。

「方法があります……が、ずいぶんな準備期間を要します。他国の領空を通り抜けることにもなるので、それらの調整が全てうまく行ったらの話ですが」

「方法があるなら我々は選択している余裕などない！ 必要な交渉ならすぐ取り付けるから、どうやって仕留めるかを早く教えてくれ！」

すると剣は体操座りの姿勢を崩し、脱いでいた靴を再び履いてから腰を上げた。そして右手を軽く握りながら言う。

「現状のカテゴリーエラーに対抗するには天照の光火砲を使うしかありません。しかし現状の光火砲では敵わない、威力が足りないと言うのなら」

体の前に拳を構えた彼女は、ゆっくりとした動作でそれを突き出しつつ一言

「天照が光火砲になればいいのです」

作戦準備の為、航空空母《高天原》は名古屋港に着水・停泊中
西暦2022年8月3日 午前10時《

いつもは航空機が忙しく発着している小牧基地の滑走路。しかし今日は、平日の朝10時であるにも関わらず何千人という観覧者、そしてマスコミが基地内に入り、航空機が通る道を囲うようにして並んでいた。

誰もがまだか、まだかと期待に胸を躍らせている。破滅しそうになった世界に手を差し伸べ、そして救うために戦っている奇跡の戦士達、その到来を彼らは知っているのだ。

「な、何だよこの人だかりは……」

醇一は大型航空輸送機の窓から滑走路を見下ろす。空からは滑走路に集まった人々のうねりがはつきり見て取れた。

「わああ、占拠でもされたんです？」

彼の隣の座っていた夜見は身を乗り出し、同じ窓から地上を見下ろした。無駄に楽しそうな様子からは、前の席に座っている豊野も、太ももの上に乗っかられている醇一も、夜見が16歳という年相応の女の子であると実感できる。

「（こういう所を見ると、余計に訳わからなくなるな……）」

醇一は夜見の横顔を見ながら心内で思う。

まるで社会科学見学にでも来たかのような様子で笑う彼女は、今やF

0天照のほとんどを知りつくし、そしてメンテナンスしている。

航空空母《高天原》を拠点とする第1特別防空隊、その開発技術長の役は名ばかりでないどころか、現世の技術者達を出し抜いてひとり未来の世界を歩いている状態だ。

天照のパイロットである須佐美 醇一、天照のアビオニクサーである草薙 剣、この世では一番天照を知っている堀越 夜見、彼らを管理する役目の豊野 萌美。この4人は今日、作戦を成功させる

ための準備に愛知県の小牧基地までやってきたのだ。

「豊さん、一体何をやる気なんだ？」

旋回していた輸送機が高度を落とし始めた頃合いに、醇一は豊野に向かつて訊ねた。

「別に複雑な事をする訳ではない。一般国民へF-0天照の存在を表沙汰にするだけだ。音楽隊によるパレードも行われるから、須佐美と堀越には着陸後、牽引車の前で観覧者に手を振って歩いてもらう。草薙はその後ろを歩くだけで良い」

「はあ！？ 何で俺たちがそんな事しなきゃ……」

「馬鹿者。お前達が有事に戦闘できるのも、普段生活を出来るのも、全て国民のおかげなんだ。お前は見世物になりたくないだろうが、今国民感情を煽っておくのは戦略上欠かせない——言ってしまうえばこれも1つの作戦なのだ。それを理解した上でちゃんとサービスしろ。解ったな」

豊野は腕を組みながら淡々と話す。彼女の言う通り、醇一は人前で何かをするという事はあまり好きではない。それが本意でないのなら尚更だ。しかし豊野の言い分もまた正論であり、臭い演出をしてまで救世主をアピールする事は重要だと醇一も理解している。彼は抑え込めない葛藤のストレスを表情に出して訴えていた。

「気持ち悪いぞ須佐美。もうすぐ着くんだからちゃんと笑顔を準備しておけ」

「ったくもう何だよ……良いよなー剣は」

醇一は文句を漏らしながら、輸送機に搭乗してから今まで一言もしゃべっていない剣へ自然を装って話を振る。

「……………」

しかし返事はない。剣は手元で自分の髪をいじりながら、視線も動かさずずっと同じ姿勢のままで座っていた。

「おい剣」

「……………。はい、なんですか？」

もう一度だけ声を掛けてみると、変な間を置いてから今度は普通

に返事をした。その挙動はまるで、今初めて呼ばれたかのような違和感のあるものだった。

「んえつと……お前、豊さんの話聞いていたか？」

「すみません、少しぼうつとしていました。何の話でしょうか」

「何だ聞いていなかったのか草薙。もう一度言うからちゃんと聞くんだぞ……」

醇一達を乗せた機が車輪を下ろし、滑走路を走りながらその速度を落とす。輸送機と言ってもそのサイズは大型旅客機よりも大きく、太く造られた胴体は戦車を4つ同時に詰められる程のペイロードがあるものだ。滑走路に待ち受けていた人々はまずその大きさに目を見張っていた。そして4人が外付けの階段を下り始めると、大きな拍手と歓声が巻き起こる。その熱狂を更に扇動するように、大型スピーカーからは自衛隊員によるアナウンスが響いていた。

『今先頭を歩いている方が、我が国の新たな主力となった《F-0天照》のパイロット、須佐美 醇一二等空尉であります。その隣にいるのがSDC1（第一特別防空隊）の戦闘指揮官、豊野 萌美三等空佐であります』

紹介を受けてまず豊野が大きく観衆へ手を振った。にこやかに浮かべた笑顔には引きつった感じなどない。笑う事が必要だと思い込めるなら、愚直な彼女にとって完璧な作り笑顔を浮かべる事はさほど難しい業ではなかった。しかし、醇一は思うようにそれが出来ない。笑わなければいけない、あえて英雄として立ち回らなければならない、そう思い込もうとする程に表情が硬くなってしまっていた。『豊野二佐の後ろを歩いている方は、SDC1技術開発長の堀越 夜見特別二等空佐であります』

「やつほー！ みんな声援ありがとー！」

夜見は観衆に声で返事をする余裕すらあった。彼女もまた“作戦”としての振る舞いを意識していたが、温かい声援には相応の態度

を返すという事に全く抵抗を抱かなかった。

紹介を受けた3人と無言で階段を下りた剣が滑走路をまっすぐ歩き始めると、準備していた音楽隊がパレード開始を知らせる演奏を始めた。

『それでは開かれた輸送機の胴体部分にご注目ください。これが我が国を守り、そして悪しき侵略者達を撃滅する自衛隊の新兵器……その名もF-0天照です！』

輸送機に納められていた天照の機体は、小さな牽引車に引かれて滑走路へと車輪を付けた。そして歩いている醇一達を追うようにゆつくりとしたペースで前進する。独特の黒いボディ、陽光に輝く滑らかな光沢……その圧倒的存在が観客の目の前を通って行くと、音楽に合わせていた手拍子が厚みのある拍手へと変わっていく。

彼らが歩く方向には、小牧基地の司令長が壇上で待ち構えていた。輸送機から100メートルほどの道のりを歩き抜くと、今度は観衆が円状になって醇一達を取り囲み、小牧基地のボスと醇一達の対面に注目した。

豊野に並び醇一と夜見が司令長に向かい敬礼する。

「SDC1豊野三佐、以下隊員3名、ただ今到着いたしました」

「うむ、前線からわざわざご苦労。君達のような英雄が我が基地に来てくれたおかげで、隊員達の志気もずいぶん上がっているぞ」

司令長の言葉に豊野がきはきとした口調で返す。

「はっ、それならば私共も嬉しい限りです」

「そう硬くならなくても良いぞ豊野三佐。須佐美二尉、堀越特二佐もご苦労。それと君は……」

司令長が目線を下げ、醇一の影に隠れるようにして直立していた剣を見やる。そして穏やかな口調で声を掛けようとすると、豊野が聴衆に聞こえない声で司令長の注意を引いた。

「お……ああ、失礼。君は連れの子だったね。ではこれから担当の職員が工場の方へ案内する。私は観覧者を連れて天照の戦歴資料館を案内するから、また時間が出来たら今後について話そうか豊野三

佐

「こちらこそ意見を窺いたい所存です。今回は協力していただき、本当にありがとうございます」

《1時間後 三菱重工業 名古屋航空宇宙システム製作所 工場内》

4人は三菱重工業の職員に連れられて通路を歩き、目的の工場内へと向かっていた。建物の中までくれば周りには関係者が行き来しているだけで、パレードの時の様なざわめきは一切ない。ここは完全に外から断絶された、研究と実験、そして実際に航空機を作る純粹な仕事場だ。

「豊さん、さつき司令長に何言つてたんだ？」

「ああ……あれは草薙の存在だけはばかしてくれと注意しただけだ」

「天照の存在をバラしたのに、なんで草薙だけは内緒なんだよ」

先ほどの催し中、豊野が司令長に向かって小さく注意していた所を醇一は見ていた。彼は何かと物事を後に後に教えられる立場なので、目の前で交わされる秘密が余計に気になる気質であった。しかし関わっている時間が長いだけに、豊野も手慣れた対応力を持ち合わせていた

「お前達はもう慣れちゃって感覚がズレているかもしれないが、一般的に考えて女兒を先頭の最前線、あるうことか天照に乗せている何て事が公になったら、矢のように批判が飛んで来ること間違いない。それをふせぐ……という訳だと少し嫌らしい感じがするが、事が円滑に運ばなくなるのはもっと好ましくない」

黙って歩き続ける剣を見下ろしながら、醇一は“剣を天照に乗せる事への批判”という共通項からある人物を思い出していた。

「（そう言えば衛生科の朝比奈さん……だっけな、この前通路です

れ違った時も俺の顔を見てあからさまに不機嫌な態度になったし、他の人に対しても似たような態度取り始めたって聞いたな……」

もちろん醇一も豊野も、まだ子供である剣を戦闘機の一部として使う事に積極的ではない。それでも天照を運用するためには必要な事であるが、高天原の中に広がる“剣の扱いについて”という話題には頭が痛い所があった。今日の観覧式は、直接ではないにしろそれを体感した催しでもあったのだ。

「ここが天照の研究および改造を行うための隔離施設です。着工まではこちらにアクセスできる人間は、この場の5人と助手の合計13人に制限されています。作業を円滑に進めるために同僚、一般人、得体の知れない相手に対しては秘密を厳守するよう再度お願いを申し上げます」

工場内の通路から地下へと続く階段を下りた先によりやく目的の場所があった。案内してくれた職員は醇一達に注意を述べてから扉を開き、中に入るよう手振りで示した。

「うんうん広いなあ……地下施設でこの設備の整いようなら……いやはやこれは売れるね」

興味津々な夜見は1人案内された施設の中へと走り出す。

入口から広がって見えるのは、硬い岩盤に穴を掘って作られた巨大な作業施設だった。縦は50メートル、施設の平面は縦長に広がっており、航空機1つを組み立て・車輪移動するには十分な広さがあった。建造予算の関係からか壁面には岩肌が露出していたが、床は人口素材で完璧にコーティングされており、靴音が鳴るたびに複雑な反響音を施設の中に響かせていた。

「お……もう天照が運び込まれている。ところで俺、ここで何をやるのかまだ説明を受けていないんだけど」

醇一が辺りを見渡していると、施設の左奥の方に天照の機体が置かれているのを見つけた。醇一は“天照を空輸で小牧基地に運ぶ”という所までは知っていたが、何をするのかはまったく聞かされて

いなかったのだ。

夜見は相変わらず配置された設備を縦横無尽にいじりまくっている。時々変な爆発音を鳴らしながら飛び回る彼女は、もはや手の付けようがない子供だった。そんな彼女が今作戦で最も重要な役割を担っている事を豊野は説明する。

「お前や櫛名田にも、津軽海峡に鎮座する巨大なカテゴリーエラーについては説明したな。しかし奴は、現状の天照を以ってしても倒せない程の敵である事とも言ったな」

「ああ、でも策はあるって付け足しておきながらずっと教えてくれなかったじゃないか」

「それも交渉の関係だ。とにかく天照の光火砲はカテゴリーエラーに対しても確かに有効だが、通常射撃では出力が全くと云っていいほど足りないのだ。そこで天照の機体そのものに改造を施し、天照そのものを光火砲とする事で大出力の射撃を可能とするのだ」

彼女の言葉をそのまま受け取り、とりあえず自分で理解しようと試みた醇一だったが、それは無理な事だとすぐに気付く。

「……えと、言っている意味があまり」

「光火砲はただのビーム兵器じゃない。本質的な部分は私もまだ理解していないが……その強大な破壊威力は、天照のボディそのものにも適用する事が出来る。だから天照に改造を施すことにより、機体から光火砲を放出しながら航行する事よって光火砲そのものに成れるのだ。その状態でタタリ……ハヤアキツヒのコアへ機体ごと激突して貫けば倒す事が出来る、言い換えればそれしか方法が無い」

「んばっ……そんなぶっ飛んだこと誰が考え……」

「剣ちゃんだよ」

その辺をうろついていた夜見がいつの間にか醇一の隣に戻ってきた。ぴよこんと顔を出すように見上げてきた彼女は、立ったままの剣を一度見やっってから語り始める。

「ま、私もそういう発想が無かったわけじゃないよ？ ただやっぱ、私はこの世界の技術屋なんだからアイデアが売れないと思って

ただけ。ほんとだよ？」

「いや別にそこを問い質しているんじゃないって……」

「そう？ とにかく、私は剣ちゃんのアドバイスを借りて全面的に改造する事になったから、しばらく高天原からは離れるし天照も使えないよ」

「んん……まあとにかく、何をするかは分かった。それで今日俺がここに呼ばれたのは、さっきのパレードに出る為だけ……だから祕は来なかったと」

「そういう事。だから今日はみんな任務お疲れ様だよ！ 私は今日から2週間ここに引きこもって作業進めるんだから、醇一は私の着替えとか下着とか後で持ってきてよね」

「はあ！？ んなの他の隊員に任せりゃいいだろ！ けっ、ここまでついてきて損した気分だわ。とつとと帰ろうぜみんな」

呆れた醇一は大きくため息をついてから踵を返した。一方豊野は“無事任務は完了させた”と言わんばかりの涼しい表情で入口の方へ歩き出す。しかし剣はその場に立ったまま動く様子が無い。すっかり一緒に帰るものだと思っていた醇一は、声と視線を立ち止まったままの剣に向けた。

「どうしたー？ 帰らないのか剣」

また反応が無い。どうも今日は調子が悪い機械の様に、彼女が全く反応しない時がある。醇一は早足に彼女へ駆け寄ると、頭をぼんぼんとたたいて剣の気を引いた。

「……。はい、何でしょう」

「夜見は置いて、俺たちはもう帰るぞ」

「……。私は、改造の初期段階についてアドバイスしなきゃいけないので、今日はここに残ります。迎えに来てもらえるなら、明日の昼すぎにお願いします」

「お……おう、そうか解った。じゃあ明日には来るから、ちゃんとご飯とか食べろよ」

「はい」

やはり最後の最後まで受け答え方に違和感が残っていた。醇一は彼女に対し、何があつたのかを今のうちに明かしておこうかとも考えたが、自分の疑いにどうしても確信を持てなかった。そんなあやふやな気持ちを「これから彼女達は仕事、そろそろ出ないと」という上辺の配慮で薙ぎ払ってしまう。

「……………」

扉に遮られ、豊野と醇一の姿が見えなくなると、夜見はひとつため息をついてから安置された天照を見あげる。そして立ち姿勢のまま動かない剣に訊ねた。

「ねえ剣ちゃん、この前言つてたあの約束……やっぱり守らなきゃダメなの？」

「この前言つていた、あの約束、ではどれがどれか解りません」

「だーから、天照をいじって良いのは表層だけで、システムは解つてもいじらないって約束の事だよ。私としては単純に知り尽くしたいだけなのに、何でいじらせてくれないの？」

「理由を述べる必要はありません。今回の改修は天照の仕組みを固定するだけですから、余計な操作を加えても意味は無いです」

夜見の願いは簡単に、かつ真っ向から拒否される。剣の冷徹すぎる態度にはさすがの夜見も少し腹を立てていた。

「どうして？ 私自分で言うのもアレだけど、まだ16歳なのにやろうと思えば新しい航空機の設計から製作まで出来る天才なの。そんなエキスパートに天照のシステムをまかせようとか思わない訳？ いくら剣ちゃんが未来から来たって言っても、まだ私より5つも下じゃん。準備は整ってるし、天照の管制システムを私が納品したんだから、その気になればボックス全部バラして何もかも私好みに変更する事は可能なんだよ？」

だんだんと声色が強くなっていく夜見。喋るたびに天照と言う芸術品を弄らせてもらえない憤怒が露わになっていく。彼女の声が残

響となつて施設に響き渡るが、それでも剣は驚きもしなければ慌てもしなかった。しかし一言

「仮にボックスを全てバラしたとしても……あなたは何も変更しない。出来ない」

何もかも見通しているような物言いに、ついに張っていた線がプツンと切れる。夜見は体をねじって剣に迫り、手こそ出さなかったが至近距離にまで詰め寄る。

「……私には感情があるのよ。あなたと違って」

「何の話ですか」

「このつ——」

ついに夜見が右手を上げようとしたその時、剣は鋭い視線を向けながら呟いた。

「あなたは変更なんてしませんよ。だって……」

醇一は扉を閉める際、無言で彼女らを見やった。夜見は元気に手を振っていたが、表情は無愛想ながらも懷いていたはずの剣がそばを向いていた。

「……なんだかな」

少しだけ寂しいような気持ちを実感する。まるでようやく仲良くなれた親戚の子供が、親の帰宅と同時に自分の手元から離れてしまふような、そんな寂しい気持ち。しかし男醇一、そんな心境をうつに吐露出来るはずが無かった。

「どうしたんだ須佐美、無駄に落ち込んだような顔して」

「別に……多分地下とかが嫌いなんじゃないかな」

「はあ？」

剣の変化は自分のせいではない——と考えようとするたびに妙な嫌悪感が襲ってくる。思考のループにはまり込みかけているのを感じた彼は、両手を顔に当てて気持ちを入れ替えようとした。

「むっ、何か変なものが……」

今度は触感的な違和感が頬辺りに走る。そのつぶやきを聞いた豊野は彼の顔を見て言う。

「何かいっぱい付いてるぞ須佐美」

頬を指差された彼は、肌にくっついた細い物体を軽く指で掻き取る。

「こ……これってまさか……」

色素が薄く、細くて長い糸。数十本貼りついていてそれを束ねてようやく正体に気付く。

まさにそれは、抜け落ちた草薙 剣の頭髮だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5895y/>

アマテラス

2011年12月2日18時50分発行